

いのちの位相 (私家版)

有國 智光

はじめに	2
一 意識 動的定常状態	4
脳...4 意識...6 へそと台風...8 無生法忍...11	
二 言語 自己保存系	14
コンピュータ...14 言語の本能...17 卵と鶏...19 言語道断...21	
三 自己 重層的同一	24
方程式...24 コブラ...26 つむじ...29 悪人正機...31	
四 いのちの位相	34
腑分け...34 一刀一断...44	
おわりに	47

はじめに

ろうそくが一本、静かに燃えている。

風がかすかに動き、炎がゆらめいて　またもとの静けさに戻る。

これから《いのち》について、私自身における実際を^{あらわ}露そうと思う。けだし《いのち》の比喩に、炎はよく用いられる。しばらく私も炎の比喩を借りて、自分が何を語ろうとしているのか見通しをつけてみたい。

静かに見える炎も、視点を変えれば絶え間のない変化の連続である。《いのち》は静か動か。おそらく、動であって静であろう。動きを内に感じさせぬ《いのち》はない。しかし同時に、《いのち》はやわらかく^{つよ}勁い静けさとしても響いてくる。

第一章でこれを　動的定常状態　として定位する。以後各章において、表向き《いのち》とは離れた題材に頼るが、第一章では　意識　に焦点を当てる。

第一章は《いのち》の感触を　私自身が　見失わないために書かれる。

炎は燃え続ける。その機構は何か。

第二章では、転変にしなやかに添って存続する《いのち》のあり方を　自己保存系　として分析する。変わらず存続するためには変わらぬものがあり、したたかに適応し続けていくからには柔軟なシステムが機能している。

さらには、その背景にある豊饒にも触れてみたい。

題材としては　言語　を取りあげる。

第二章は本題を支える一つの軸を提供するはずである。

ロウは化学的な物質であり、光は物理の対象となる。ろうそくの輝きに看破されるのが私の^{むみょう}無明で、信長を焼いた本能寺の炎が歴史として語られるとすれば、ろうそくの炎とは^{ひっきょう}畢竟何か。

しかし私の《いのち》は、平面的な解釈を拒む。

第三章では　自己　を題材に、見かけ上の同一性を複数の地平に^{ひら}斬り抜く。ただそれを通じて、無前提の同一性もまた^{あら}顕わになるであろう。

重層的同一　と題し、第二章に言わば直交する軸をつかむのがこの章の眼目となる。

炎の比喩はここで離れる。

以上三章を踏み切り板に、第四章で本題の《いのち》に躍り込む。しかし案外 大袈裟な蛇足と言うべきか。

そもそも、この章には結論がない。

《いのち》の外に立つことはできない。私は無根拠に私における《いのち》を手探りするばかりだ。後は 《いのち》が《いのち》を語るにまかせる。

一 意識 動的定常状態

脳

中田^{なか だ}力^{つとむ}という脳神経医学者・物理工学者が、最近脳に関して斬新な「仮説」を発表した。¹ 中田はまず、「ニューロン絶対主義」を断罪する。ニューロン絶対主義とは、「脳の機能とはすべてニューロンのネットワークが作り上げるものである」という「脳科学の中心教義 (central dogma)」をいう。簡単に言い直せば、視覚や聴覚、あるいは言語機能などといった機能はすべて、大脳新皮質上に対応する処理単位をもつ、という考え方である。

ちなみに、目からの視覚情報が後頭葉の第一次視覚野に、耳からの聴覚情報が側頭葉の第一次聴覚野に入るのは解剖学的な事実であり、運動失語がブローカ野の障害から、感覚失語がウェルニッケ野の障害から起こるといったことも実証されている。さらに、「理性を持ち、感情を抑え、他人を敬い、優しさを持った、責任感のある、決断力に富んだ、思考能力をもつ哺乳類」としての至って人間的な機能が、前頭前野（ほぼおでこの内側の部分）に関わることも間違いない。

しかし同じ機能局在論が、「こころ」や、もう少しゆるめて「意識」にも²適用されるかどうかは別問題だ、ということだ。

中田は続いて、「自然界を支配する原則」として (1) 恒常状態と (2) 形態 を提示する。

自然は設計図に頼らずにすべてを形成している。ありがちな誤解だが、たとえばヒトのゲノム（遺伝子の総体）に、ヒトの完成図は描かれていない。遺伝子には、一つひとつは単純な、繰り返し実行できる規則 特定タンパク質の合成など が記述されているにすぎない。

環境が、ある一連の規則を実行せよとの引き金を引く。すると、とにかく与えられた状態を出発点として、再び環境が停止するように働きかけるまで、同じ作業が何度も何度も繰り返される。

¹ 2002年発行、紀伊国屋書店『脳の方程式 ぶらす・あるふぁ』（以下『ぶらす・あるふぁ』）を指す。正確には同書は前年に同社から発行された『脳の方程式 いち・たす・いち』（以下『いち・たす・いち』）の続編で、前著では複雑系としてまとめられるであろう現代科学の潮流を概観した後、やや控え目に提示された「原理に限りなく近い仮説」としての「脳の渦理論」を、もう少し丁寧かつ大胆に展開したものである。前著の書名の「いち・たす・いち」は、根本的にはオン（発火）かオフかの二値しかとれない二進法的なニューロンが、「バイナリシステム」としてマクロに機能したとき言わば相轉移する様を、重心を既存の複雑系の諸概念に置いてとらえようとしたものと理解される。それに対して「ぶらす・あるふぁ」には、積極的に新しいパラダイムを提示しようとする意図が込められているようだ。その是非は私の知識・判断を超えるので措くとしても、ここではもっぱら新著の『ぶらす・あるふぁ』に触れる。

² 私はここで、「意識」の方を「こころ」よりも広いものとしてイメージしている。

特に発生の初期、胚にとっての環境は大きく変移していく。しかし全体としての環境は、たとえば哺乳類の場合子宮の中で、ほとんど厳密にといってよいくらいに一定の範囲に保たれている。この環境維持の働きが恒常状態、ホメオスターシス（homeostasis）である。

簡単な規則に従った特定環境下での単純な手順の反復が、ある定まった形態を形成する。ただしその形態は、外から物差しをあてて規格をそろえた工業製品のような意味で同じ形をしているのではない。ある恒常状態において、許される範囲内の環境の変動　ゆらぎをきっかけに、自分自身の形成が環境そのものを変えていく中、しかし全体としての恒常状態にとどまっていた結果としての、同様な形態なのである。

このことはさらに推し進めるならば、たがいに類推可能な「歴史を内在している」とでも言えそう。私の現在における姿は、私が私となってきたすべての歴史の顕現である。

生体における「形態」は、ある環境への適応、あるいは環境を取り込んだものとして、そのままある機能の具現と言える。私たちの「脳」　主に^{しわしわ}皺々のあの脳をイメージしても、そのようにして形成された形態であり、中田によれば、その「形態」がニューロンネットワークには還元できない機能を実現しているというのだ。

大脳皮質はコラムと呼ばれる円柱のようなユニットの集まりで、各コラムは六つの層に分かれ、総合して「大脳皮質の六層コラム構造」と呼ばれる。そしてこの六層コラムがあ皺々に形成されていく過程は、発生学的に解明されている。

詳細な解説は省略するが、中田の「仮説」には次の二点が重要になる。

大脳皮質の実質であるニューロン細胞は、自分たちの住み着き場所である皮質で生れるのではなく、やや離れた所（神経上皮細胞層）で誕生した後、やがて大脳皮質となるべき場所へと引っ越して来る。

その際、「ラジアル繊維」と呼ばれるワイヤーのような組織が引越しの道案内になる。胎生期、まだ脳が形になる前、神経上皮細胞層と大脳皮質層との間にこのラジアル繊維が現れて、二つの層の間に張りめぐらされる。ニューロンの赤ちゃん（神経芽細胞）はラジアル繊維に沿って移動し、落ち着き先（コラムの六層のうちのいずれか）に着くと、前後して到着した兄弟の細胞たちと共同してラジアル繊維を中心にコラムを形成する。それがあちこちで並行して進行する結果、大脳皮質は鉛筆を束ねたような形になっていく。鉛筆の一本が一つのコラムであり、鉛筆の芯がラジアル繊維に相当する。

皮質の形成が進み、ニューロン細胞の道案内の役目を終えると、ラジアル繊維は消失して後に空洞が残る。この「空洞」が機能を持つ、というのが中田の論点の一つである。

もう一点はラジアル繊維の張られ方に関わる。

設計図を持たない自然には、まず二点を決めてその間をつなぐ、といった風にラジアル繊維を張ることができない。ラジアル繊維は一つの側（神経上皮細胞層側）から、単純な法則に従って伸びていく。その単純な法則が「熱対流」だというのが中田の着想である。

活発に細胞分裂を行っている胚の内部では、多くのエネルギーが消費され、相当量の熱が発生する。その熱は胚の外 哺乳類では子宮の羊水中 へと発散していき、熱の流れ、熱勾配といった環境を作り出す。ラジアル繊維はこの熱の流れる方向に沿って伸びていくと言うのだ。

『いち・たす・いち』『ぶらす・あるふぁ』ともに、カラー口絵として熱対流のシミュレーション画像が載せられている。(内容は『いち・たす・いち』のものの方が詳しい。) 並んで掲げられている実際の脳の断面画像と、ピッタリといってよいほど、似た結果が示されている。

以上を一旦まとめてみると、次のようになる。

大脳新皮質には、かつてのラジアル繊維の名残^{なごり}として、たくさんの小さな空洞がある。そしてこの空洞は、脳内の熱の流れの方向に沿って伸びている。

この空洞が何らかの「機能」を担っているとすれば、冷却機能のほかにもどのようなことが考えられるか。それにはもう二、三の解剖学的な知識と、大胆な飛躍が必要になる。

意識

同じ脳でも、小脳の研究においてはニューロンを機能単位とする考え方が大きな成果を収めている。現在ではシリコンチップにならって「小脳チップ」という用語が用いられるまでになっているらしい。

小脳は、主に運動の制御を司る中枢である。習得された運動を円滑に制御するだけでなく、小脳には新しい運動を学習する機構も必要になる。

学習は、各感覚器官からの入力^{いり}の重みづけが変更可能で、フィードバック経路が備わっているならば実現できる。入力^{いり}の重みづけの変更は、シナプス(ニューロンとニューロンの接合部)の効率を変えることで、脳のニューロン全般で日常的に行われている。問題はフィードバック経路ということになるが、小脳ではプルキニエ細胞と呼ばれる出力ニューロンに一对一で、「登上繊維」という特殊なニューロンが見出される。登上繊維が発火している間、プルキニエ細胞は各入力間の重みづけを変え続ける。登上繊維の発火が止まった時点で学習は固定され、意識^{いし}しなくても所定の運動が遂行されるようになる。

ところが、大脳には小脳での登上繊維に相当する組織が見当たらないのだ。つまりニューロンに拘泥する限り、大脳にはフィードバック経路が存在しないことになってしまう。

一転、大脳には小脳には見られない構造がある。

大脳はその容量に比して、細胞外液が極端に少ない臓器なのだそうだ。大脳皮質のニューロンとニューロンの間は、グリア細胞で埋められている。グリアは発泡スチロールのようにすき間の多い構造を作っており、しかもそのすき間の水を吸い出す機構まで備えている。水の吸い出された「乾いた空間」には、二酸化炭素が詰まっているらしい。

「乾いた空間」の存在に着目したとき、大脳の表面を覆っている軟膜の下、六層構造をも

つ皮質の第一層（一番外側）と向かい合って存在する特殊な層がクローズアップされる。この層は異様に電子密度が高いのだ。

ところで、大脳皮質の第一層には、小脳のプルキニエ細胞に相当する大脳の出力ニューロン、錐体細胞の樹状突起がある。樹状突起は、シナプスの受け側の構造である。さらに、水は空気（二酸化炭素を含む）と比して電子の良導体である。

整理すると次のようになる。大脳の表面には、比較的乾いた空間をはさんで、電子密度の高い層と、錐体細胞の入力器とが面している。

この構造を、中田は ELDER (Electron-dense Layer and Dendritic Ramification) と命名している。訳せば「高電子密度層・樹状突起共構造」とでもすべきか。さらに、ELDER の全体を LGS (Lattice Gas Shell) とも呼んでいる。同じく「格子化気層外皮」としておく。大脳全体を球で置き換えるならば、表面を LGS が覆い、その下にコラム構造からなるニューロンネットワークが位置することになる。

何らかの理由で比較的乾いた空間の水の含有率が上がった場合、水を媒介に高電子密度層から皮質第一層への電子の移動が起こり、まとまった数のコラムに対して電気信号を発生させる。これを中田は、「ELDER とは水を神経伝達物質とするシナプスなのである」と表現している。

さて、以上で錐体細胞に対するフィードバック経路が形態として確認できたとして、残る問題はその制御機構である。

大脳新皮質にびっしり並んだ各六層コラム構造の真ん中には、かつてのラジアル繊維の名残の空洞がある。「空洞」の方から見れば、コラムを貫通して、出口が ELDER の間隙につながっていることになる。ラジアル繊維が「熱対流」に沿って形成されたものであり、今空洞の内部が二酸化炭素を主成分とする流体で埋められているとすれば、その流体は恒常性の高い定常流を形成していると考えられる。³

ここで定常流の一部 特定のコラムを通り抜けている間に、「微かな乱れ」が与えられたとする。（そのコラム内のニューロンへ伝わってきた電気信号が消失したとき発生する微量の熱で、微かな乱れを生じるには十分効果的らしい。）すると音波とともに「渦波 (vortex wave)」が発生する。音波は発生地点からすべての方向に向かって球状に伝播し、細胞内液などの水に吸収されてあっという間に消滅するが、渦波はもともとの定常流に沿ってコラムの空洞内を進み、ELDER 間隙に到達すると、そこから二次元平面状に減衰しながら広がっていく。ちょうど水面に広がる波紋のように。

³ コラムを貫通する空洞の入口側、つまり大脳の下には「中脳網様体」と呼ばれる組織がある。これは無数の軸索が絡み合った網状の組織で、多くの信号が入るにも関わらず出て行く軸索の数が圧倒的に少ない、入口があって出口のないような構造になっている。電気信号が消滅するところでは必ず熱が生じるので、中田はこの中脳網様体が定常流形成の原動力となる中核体温を保つための機構であると見なしている。

ELDER 間隙を伝播する渦波は、自分が出てきたコラムの真ん中の「穴」を中心とする円状に、局所的に水の含有量の多い場所を作る。それがスイッチとして機能する。

以上が中田による脳の「渦理論」の概要である。プルキニエ細胞に対して登上繊維が一一対一で対応する小脳チップと異なり、中田の描く大脳チップは複数のコラムからなる二次元構造をもち、しかも特定コラムに対する入力信号が周囲コラムの錐体細胞に同期されて届く「分配器」のような働きをすることになる。そこに、中田は単なる運動の制御にとどまらない、総合的な信号処理 思考 の立脚点を見出しているのだろう。⁴

興味を引かれるのは、脳の渦理論によると「意識」が実に受け入れやすく定義されることだ。中田は脳内、ELDER の総体である LGS に広がる「定常流（静的にイメージできる動きの総体）」が意識の実体だという。⁵

「脳機能にはニューロンのネットワークのみではどうしても説明のつかない現象が数多く存在する。それは、脳の中にニューロンネットワーク以外の機能構造があることを強く示唆する。母なる自然の大原則は、その秘密を解く鍵が脳の形態形成過程にあることを教えてくれた。……最初の成果は、脳の形態が熱対流の原則に従った自己形成であることの発見であった。渦理論が静かに産声を上げた瞬間である。」（『ぶらす・あるふぁ』p. 25）

ここで、中田の渦理論全体の当否には触れない。ただ、そこから派生する意識の定義には いのちの比喩として 全面的に依存する。

へそと台風

^{りょうあん} 竜安寺の石庭に虚心に対座すると、静かに配置された石たちが動き出し、ある緊張感の中に巻き込まれ、特定の「どこか」に向かって引きつけられるような印象を覚える。その中心には 白砂が広がるだけで何も無い。

⁴ 中田自身が「仮説」と呼んでいるように、渦理論は現時点で実証されたものではなく、またある意味で直接実証することのできない面を含んでいる。また、渦波をスイッチ機構とする ELDER の反応速度がどの程度に見積もられるのかなど、直接触れられておらず、説明の欲しい点も多々ある。さらに、それを脳の標本を見たことすらない私が紹介するのだから、これまでの話を受け入れるかどうかは各自の判断に任せる。

⁵ 意識に関して言えば、麻酔がなぜ効くのかということについてすら、実はまだ定説がない。麻酔効果をもつものにはアルコールやエーテルのように揮発性の物質が多いのだが、薬理的に共通する機構が見出せない。一方、麻酔の効き具合に気圧が関係するという経験的な事実もある。意識を脳内の定常流と理解すると、（実証的とは言えないにしても）つながりが見えてくる。麻酔薬はニューロンに直接働きかけているのではなく、脳のすき間を流れる流体および水の方に作用していると考えられるのだ。何らかの理由で脳内の生理的な定常流が妨げられると、それを前提とする意識作用 ELDER と渦波による大脳チップの機能が滞る。

なお、ここでは意識を意識内容とは切り離して、「意識があるかないか」といった局面で問題になる「正常な覚醒」に近い意味でとらえている。さらに、おそらく私は無意識に、「覚醒」を開悟とでも呼ぶべき宗教的覚醒（宇宙的生命と私の実際との相即）と重ねてイメージしている。意識という用語を中心に、このあたりだけでなく本小論全体に混乱が見られるが、その整理は今後の課題としたい。

これはどのような出来事なのだろうか。

最近の研究によれば、対になっている石の「対称軸」を描き、今度はその「石たち」をまとめたグループ間の対称軸を求め、……と続けていくと、対称軸の全体がきれいな樹形を描き出すそうだ。⁶ そしてその対称軸の樹形と相対したとき、「私」の座った位置との引斥の緊張・均衡において、ある広がりをもった一点が輝き始める。おそらくそういうことなのだろう。

この感覚は写真では味わえない。実際に石たちと出会い、彼らを支え彼らが支えんとしている関係性へ「加担」したとき、^{こっぜん}忽然と顕現するリアリティーである。このとき石たちは生きている。そしてその関係性の「中心」も、ただの石以上に、実在する。⁷

このような、私の参加と相即して実在する虚中心を、「へそ」と呼ぶことにしよう。

ここで重要な点は二つある。へそは私の参加を俟って初めて実在する。私抜きに、つまり客観的には、記述できない。またへそは、へそそのものを見ようとしたときには消えてしまう。白砂がへそではない。空間がへそでもない。へそはむしろ、それがあ^る限りはそもそも初めからそのようにある、といったあり方で、白砂や空間、さらには私よりも先にそこにある何かである。

一度竜安寺の石庭のへそが見えてしまうと、つまり「竜安寺の石庭」をへそにおいて見てしまうと、何かの具合でへそが顕れてこないときには庭の石たちがうまく見えない。

へそは総体としての関係性の結節点である。とりあえずは象徴ととらえてもよい。しかし顕れているへそは、実現し機能している環境として、私を包んで顕れる。

意識もへそなのではないか。ただ石庭のへそと決定的に異なるのは、意識は私の前にたち顕れることはなく、私の背景として、私が私と感じられているときにはいつも既にそこにあるという点だ。すなわち、意識とは私が私と結んでいる関係性の総体であり、正常に現れている限りは私にとっての内的環境である、と言ってよかろう。

コンピュータがたち上がっている状態、すなわち OS (オペレーションシステム) が安定して動作している状態を連想する。OS を、大胆にアプリケーションとハードウェアとのインターフェイスと見るならば、「私が私と結んでいる関係性」というときの二つの私は、「精神活動」および「身体状況」と翻訳できる。なお、ここでのハードウェアは入出力デバイスを含む。すなわち、身体状況は知覚と行動とを包括した内容を表す。

⁶ 2002年9月26日付「京都新聞」による。「京都大人間・環境学研究科のゲルト・ヴァン・トンダー研究員(学振海外特別研究員)らのグループが認知科学の手法で解明した」とあり、コンピュータによって描かれた「樹形図」が掲載されていた。

⁷ 写真でこの感覚に触れられない理由は、写真が奥行きを欠いているという空間的な制約よりも、時間的に束縛されてしまっていて石たちが動けない、ということの方が大きいように私は感じる。(あるいはもっと単純に、撮影者の視点で切り取られているため私が割り込めないというだけのことかもしれない。)

ここで意識のへそ理解を中田の定義と重ねる。意識、私にとっての内的環境は、何らかの「定常流」である。このように受け止めることで、へそではとらえにくい動きが視野に入る。

中田の意識の定義には全面的に依存すると断ったが、実際に依存しているのは厳密には「定常流」というイメージのみというべきかもしれない。ここから先はLGSも大脳チップも必要ない。
意識 - 定常流そのものが、私の感覚では渦である。⁸

仏教でたとえば諸法無我というときの「法 (dharma)」は、とんでもなく大きな外延をもつ。略記しても、法則・正義・社会的規範、仏陀の教法、徳・属性、原因、物質的存在、概念・考えが、すべてダルマに含まれる。dharma は語根 dhr「保つ」の名詞的な派生語で、「同じ性質を保つもの」とでもいった響きをもつ語だ。

私はダルマを渦と解している。それも 台風のような渦である。

ランドサットから見れば、台風は静かな花だろう。コマ落しで時間を不自然に縮めない限り、台風が動いては見えないはずだ。⁹

台風は、その只中に身を置けば激動であっても 念のため確認しておくのと、このとき「動いて」いるのは台風そのものではなくて台風の基体たる風だが その全体像は静寂に近い。

私は今、台風に借りて私の意識を定位しようとしている。私は私の意識の只中にいると同時に、その全体的な顕れに載っている。意識はそれが正常に顕現している限り、私には静かな背景である。そうであって初めて、私の内的環境たり得る。¹⁰

意識 - 定常流、すなわち渦は、動的定常状態である。ただし、重心は「定常状態」の方であって「動的」は枕詞にすぎない。動的でない定常状態などはあり得ない。しかしその上でなお、定常状態を本来的に静的なものと誤認してしまわないために、抑えとして「動的」は不可欠なのだろう。動的定常状態と定位してはじめて、私にとっては所与の現実である定常状態がその基体と繋がれ、実体的に吟味できるようになる。

⁸ この時点で、私は中田の言う渦（狭義には定常流上の渦波）を、私の語彙に引き付けて拡大解釈している。

⁹ 台風が時速 100 km で移動しているとしても、静止軌道から見れば 1 時間に 1/6 度しか動かない。（正確にはランドサットは静止軌道よりはるかに低い軌道上を飛ぶが、その場合も状況は似たようなものだ。）

¹⁰ ここでも、私は意識という用語に不用意に 2 つのイメージを重ねてしまっている。一方で 8 ページ脚註 2 末に触れた覚醒の「現場」として開いたまま（内的環境と呼んでいるが、このときの「内的」はある求心力を伴うことの謂で、必ずしも外に照らしての内ではない）他方で身 - 心の相即に伴う出来事として身体に引き付けようとしている。その混乱ないし読みにくさの整理は前述のように今後の課題であるが、意識という言い回しをその全体性に重心を残したまま受け止めてもらえれば何とか読めなくはないと思うので、今は本小論を完結させることを優先したい。

さらに補足しておく、意識の具体的な内容（台風の比喩に頼れば、台風そのものではなくて実際に吹き荒れている風）は、私においてはそのまま煩惱の言い換えである。

中田によれば、意識 - 定常流の直接的な基体は二酸化炭素を中心とする流体とされている。私は、この流体は何らかの形で私の身体状況を反映していると考える。

中田によって定常流の「熱源」と措定されている中脳網様体は、百科事典等で調べる限り至って小さな組織で、ここのみを動力源とみなすのは素人考えにも少し無理があるように思う。脳の中心から表面へと向かう熱対流の熱源としては、間脳や、網様体に限定しない中脳全体も関与しているとみなしてかまわないだろう。間脳の視床下部は自律神経系の中核であり、情動とも関係が深い。また、中脳は主に視覚・聴覚の制御をしている。

すでに得られている脳の解剖学的ないし神経学上の知識と食い違っては困るのであらましの確認をしたが、熱対流のメカニズムの解明がここでの課題ではない。上の確認で、身体の恒常状態の制御や外部情報の取り込みに伴う熱の発生 始原的な身体状況 が、意識 = 脳内流体の定常流 に反映され得る可能性は認められるものとする。

以上を通じて、私は次のようなイメージを組み立てる。意識は、私の身体状況と私の精神活動との間に相即的に成り立っている関係性の、おのずからなる顕現である。

むしようぼうにん 無生法忍

ここまで、意識という語をあまり説明せずに用いてきた。「意識」を対象化してしまうことを避け、漠然とした中にも自明な何かのように見ておきたかったというのが主な理由である。しかし上のようにイメージを組み立てることができた今、あらためて意識の諸相を簡単に通観し、ここでつかんだ意識像が意識のどこに触れているのか確認したい。

ついでに触れておくと、実は「私」という語も意図的に曖昧に用いている。必要に応じて先で限定するので、ここではあまりこだわらずに それで納得しにくければ、多様なものが未分化な状態を未分化のままに指示する語として 受け流しておいて欲しい。

実際、意識という言葉は文脈により様々な内容を表す。「意識」という語の用例に頼って、これを次の四階層に整理してみよう。

- (1) 意識がある / ない
- (2) 意識にのぼる ~ 意識する ~ 意識を集中する
- (3) 意識的 (意図的 ~ 主体的) に行動する
- (4) 意識を持つ ~ 意識が高い

整理に当り、私という生体の存続に不可欠な行動 (環境 / 状況への適応 / 対応) に着目して階層化の軸をとった。私たちの「進化」が環境への適応戦略であったとすれば、各階層はおそらくそれぞれ異なる脳内活動を基盤にしていると思われる。

「意識がある / ない」というとき、問題になっているのは私という一個の有機体が、生物 (動物) としてある求心力のもとに統合されているか否かだ。怪我や麻酔、あるいは過度の感情などによって私が意識を失っていても、生きている限り、身体の各部は自律的にそれ

それぞれの定常状態を維持している。呼吸は規則正しく続き、体温は一定に保たれる。ただ、そのような身体状況の全体が「私」として一元的に立ち顕れていない。

意識があるという状態に対応する脳内での生理現象を、この章の前半で中田に沿って記述し、それを拵げて「動的定常状態」と定位した。

意識がある、すなわち私にとって私が私として顕れているという条件のもとに、何かが意識にのぼり、何かを意識し、そして何かに意識を集中するとき、私はその何かに対するリアクションへ備えて行動オプションを作っている。

脳内では「作動記憶 (working memory)」ないし「短期記憶 (short term memory)」が発動している。作動記憶は研究者により定義に大きな幅のある概念のようだが、あるイメージを動的に保持する脳の機能で、一方では海馬に、他方では前頭前野に関係する。心理学的には「こころ」はこの段階で発現する、と言えるかもしれない。¹¹

なお、ここでは意識のこの位相に「言語」が必然的に伴うとは考えていないのでより広くとらえたが、言語がユニークな意味をもつ局面を斬り分けたいならば

(2) 意識化 (言語化) する

を挙げることができよう。

「意識的に行動」しているとき、私は準備した行動オプション中の特定の行動を実行に移している。それには判断 そのオプションの選択 が先行する。

「選択」には、前頭前野の腹内側領域 (ventromedial prefrontal region) 眼球の真上あたりになる、前頭葉の下側の部分 が大きく関わる。また、頭頂葉の体性感覚野 (somatosensory) も、身体状況 (情動) を伝える意味で、関与しているらしい。¹²

そして何かに対して「意識が高い」という表現は、特定の色合いの複合的な行動オプションが、継続して選択され続けていると解釈できる。

この時点で意識という言葉は、個人においては人格に通じる響きを持ち始めており、他方、個人を超えた社会集団や文化に対しても叙述し得る(例:福祉意識の高い国)内容になっている。もはや対応する脳内過程を指定する必要はあるまい。

¹¹ このとき、意識された何が 外的な対象ないし状況でも、身体的な感覚でも、内的な思いあるいは感情でもあり得る は、脳内でシミュレートされている。すなわち、切り取って動的に脳内に埋め込まれている。それが「意識」に伴って私の内と外とが分化する神経学的なメカニズムであろう。

木下清一郎『心の起源』(中公新書、2002年)では、まさに記憶の成立を心の発生とする仮説を提示している。結論だけ聞くと誤魔化されたように感じるが、通読すると実に説得力がある。

¹² アントニオ・ダマシオの『生存する脳』(講談社、2000年)によれば、上記部位を損傷した患者は「感情(情動の経験)」に障害が現れ、他の知的機能に問題がない場合でも、個人的・社会的に適切な行動の選択ができなくなるという。ダマシオは、「日常生活における人間の推論と意思決定には情動が本質的に関わっている(訳者田中三彦による要約)」という主張をソマティック・マーカー仮説 「ソマティック・マーカー」は訳出されていないが、直訳すれば「体性的注意付け」として提示している脳科学者で、意識が身体状況を反映しているというイメージはもともとはソマティック・マーカー仮説から得た。

さて、このように通覧したとき、意識 - 定常流が直接には(1)の位相に触れたものであることは明らかだろう。しかし意識はそこに留まってはいない。私の意識が私のいのちの比喻であり得ると「意識」したとき、その意識の動きは再帰的に新たな渦を形成する。

大乘仏教では、縁起の法 = 渦 に対して、^{むしょうぼうじん}無生法忍というスタンスを樹立している。無生法忍を「無生・法忍」とではなく「無生法・忍」と読む。

子にとって親が所与であるように(子の存在は親の存在を前提しない限り成り立たないが、親は子をもってはじめて親になる)宇宙の果てを考えることができないように(考えている私自身が宇宙の内であり、外に立つことができないが、宇宙の内とという考えは宇宙の外と対になっている)目が目自身を見ることができないように(他に向いた視覚は自らを対象化できないが、他の表象が自を生む)無生の法は、私が私としてあるとき私と同時にかつ先立って、しかもときには私に隠れてたち顕れる。

もう少し踏み込んで誤解を恐れずに言うならば、無生の法は本当は「ない」。実際に「ある」のは、実は私だけである。しかし、私が「ある」と開き直って完結しようとした途端、閉じることのできない私の実際につき戻され、私の「ある」が隠れて私ではないもの、私の影、私の背景、の方がへそとして輝き出す。(へそそのものは見えないのであった。)

無生法忍を仏教辞典で調べると、「一切のものが空であり、それ自体の固有の性質を持たず、したがって生滅変化を超えているという事実の道理を受け入れること(『岩波仏教辞典』)」とある。

忍そのものは、素朴に「忍び、耐え、踏みとどまること」の意にとればよい。たとえばベートーヴェンの曲を聴くときのように、息の長いフレーズをそのままこらえて丸呑みしているときの感覚に近い。「動的に保持する」と言えばよからうか。

無生法と対になり、無生法を(自分よりも先に!)産み出している忍は、詰まるところ、閉じ完結することのできない私自身を受け入れ続ける つまり、開き続ける 完了することのない忍耐に他ならない。

意識を「意識」するとき、私は無生法忍である。動的定常状態とは、結局 というよりもそもそも初めから ^{オープンシステム}開いた姿なのだ。

いのちの比喻として 私は如何に私のいのちと出会い受け止めるべきかという問いの一環として 意識を「意識」したつもりが、このとき既に私の意識は私の意識を「意識して」意識している。これを自覚と呼ぶとすれば、自覚の自は私なのか意識なのかあるいは無生の法なのか。

いのちの比喻としての意識は、再帰的・重層的で非完結な、このような動的定常状態である。

二 言語 自己保存系

コンピュータ

私がパソコンに触るようになったのは 1987 年のことだ。パソコンの主流が 8 ビット機から 16 ビット機へと移行している最中で、16 ビット機といえどもクロック (CPU の動作速度) は数 MHz (現在では 32 ビット機、GHz! のオーダー) という時代である。この年に、シャープから X68000 というパソコンが発売された。何か惹かれるもの^ひがあって、ほとんど衝動的に買ってしまった。

それまでもコンピュータなるものに外野からの興味はもっていた。しかし、穴を開けたパンチカードでプログラムを読み込ませるなどというのはもってのほか、パーソナル・コンピュータが登場した後も、せいぜいマニア向けのおもちゃか、そうでなければ業務用といった印象で、とても一般向けの有用に耐える商品とは思えず、ずっと見送っていたところだった。

結果的に X68000 には感謝している。そんなことはまったく知らずに買ったのだが、C にコンパイルできる BASIC (C も BASIC もプログラミング言語の一つ、BASIC = 初心者向け、C = 上級者・プロ向けといった側面がある) はじめ、当時としては高機能なテキストエディタ¹や、初期ロットにはアセンブラ²やリンカ³までおまけでついていた。雑誌に掲載されているプログラムを BASIC で入力したりしているうちに、C を経て、気がついてみるとアセンブリ言語⁴でプログラムを書けるようになっていた。

X68000 という機種名は、CPU がモトローラ社の 68000 という IC だったことによる。実際に 68000 CPU をターゲットとし、X68000 というハードウェア上で画面に Hello, World! と表示させるソースは、次のようになる。ただし、画面表示には IOCS (Input Output Control System) コールを用いた。(なお、データサイズの指定を省略しているので、仮にこのまま X68000 上で入力・実行しようとするとおそらく誤動作する。)

¹ 「文字列」の入力・編集のための基本的なソフトウェア。ワープロと違って、文字の大きさを変えたり罫線を引いたりといった文書整形はできない。プログラムの入力や、各種定義ファイルの作成などに用いる。なお、テキスト形式で入力された、「人間に読めるプログラム」をソースと呼ぶ。

² CPU へのコマンド (いわゆるマシン語、ビット列) と 1 対 1 で対応したシンボル (ニーモニック、可読文字列) を用いて記述されたソースを、マシン語に変換するソフトウェア。ニーモニック マシン語の変換をアセンブルといい、ソースをアセンブルして得られる「CPU に理解できるプログラム」をオブジェクトと呼ぶ。

³ オブジェクトはまだコンピュータで実行することはできず、メモリにロードして制御をそこに移すために必要な情報などを付加する必要がある。この操作をリンクといい、オブジェクトをリンクして実行可能なアプリケーションにするソフトウェアをリンカと呼ぶ。

⁴ 特定の CPU をターゲット (対象) としたニーモニックと表記法の体系。CPU ごとに異なるため、C や BASIC といった「CPU を意識する必要のない」言語とは性質が異なる。(本文で示したプログラム例は他の CPU 用のアセンブリ言語と原則的に全く互換性がない。)

lea	DATA, a0	\4行下のラベルDATAの位置のアドレス ⁵ をa0レジスタ ⁶ に読み込む。leaはload effective addressの略。
move	#33, d0	\画面表示のIOCS番号33をd0レジスタにセットする。#は続くデータが(アドレスではなく)単なる数値であることを示す。
trap	#15	\例外処理15。trapはCPUのリセットや割り込みなどの例外処理を発生させる命令で、IOCSも例外の15番として呼び出される。
EXIT		\処理をOSに戻す。(EXITはマクロという機能を用いてOSのファンクションコール0番を呼び出すコードFF00に展開される。)

DATA: 'Hello, World!', 0 \表示用データ。0は文字列の終わりを意味する。

上のソースをアセンブルすると、次のようなオブジェクトに変換される。(????には表示データが実際に格納されるアドレスの値 実行時に解決される が入る。)

```
41,F9,??,??,70,21,4E,4F,FF,00,48,65,6C,6C,6F,2C,20,57,6F,72,6C,64,21,00
(0100000111111001..... .....0010000100000000)
```

ただし、「数値」を「その数値を表わす16進数⁷表記」に置き換えて示した。「H」の文字コードが48_Hなので、下線を付した48以降が表示用の文字データであることがわかる。また、IOCS番号33(=21_H)がコマンド中に埋め込まれているのも読み取れる。

アセンブリ言語でプログラムを書く、というのは独特な体験だ。目の前には真っ白なメモリ空間(厳密には一次元だが、細かいことは無視する)が広がっている。そのメモリ空間に、コマンドとデータを置いていく。最初は平板な作業なのだが、どこかある時点で、一群のコマンドやデータが、単なる平面的な羅列から「構造」へと立ち上がってくるのだ。その秘密は「間接参照」にある。

間接参照を具体的に示すと、

```
add a0, d0 \ a0レジスタ内の数値をd0レジスタ内の数値に加算
```

ではa0内のデータを直接使うのに対し、かっこをつけて

```
add (a0), d0 \ a0番地に置かれている数値をd0に加算
```

とするとa0内のデータはアドレス値とみなされ、わざわざそのアドレスを見に行き、そこに置かれているデータを利用することになる。このようなデータへのアクセス方法を間接参照という。アドレス云々はどうでもよい。ポイントは「ワンクッションはさむこと」にある。

⁵ メモリ内の位置を表わす連番。CPUはアドレスを使ってメモリにアクセスする。

⁶ CPUの中に作り込まれている、高速で読み書きできるメモリ。68000 CPUにはデータ保持および演算用の汎用データレジスタがd0~d7の8つ、アドレスの保持・参照に特化したアドレスレジスタがa0~a7の8つある。

⁷ CPUに理解できるのは0か1かを示すビット(bit, binary digitの略)が並んだ2進数だが、ふつう4ビットをまとめて16進数「数字」として0~9とA~Fの16字を使う で表わす。10進数と区別して16進数にはH(hexadecimalの略)、2進数にはB(binaryの略)を添えて示すと、

```
0=0000B=0H 1=0001B=1H 2=0010B=2H 3=0011B=3H 4=0100B=4H 5=0101B=5H 6=0110B=6H 7=0111B=7H
8=1000B=8H 9=1001B=9H 10=1010B=AH 11=1011B=BH 12=1100B=CH 13=1101B=DH 14=1110B=EH 15=1111B=FH
```

となる。コンピュータ関係では8ビット(16進数で2桁)をデータの最小単位とすることが多く、これをバイト(byte)と呼ぶ。(1バイトで2⁸=256通りの区別ができ、アルファベットの大文字・小文字、数字、基本的な記号類、がカバーできる。)

犬に何かを指差して教えようと思っても、犬は「指」を見るばかりで、指差されているものに気を向けることはない。間接参照はまさにこの指差しと同じ出来事だ。それはものを「名前」で呼ぶことに他ならない。何かを名前で呼んだとき 構造が生れる。

Hello, World! の表示プログラムも、よく見ると指差しのオンパレードである。まず、'Hello, World!' という文字列データが DATA というラベル(名前!)を用いて「アドレス値」で示されている。画面表示の IOCS は「33 番」として指定され、IOCS 自体が例外処理の「15 番」として呼び出される。詳細は省略したが、最後の行も EXIT というラベルがファンクションコール(OS のサービスコール)の「0 番」に翻訳される。

画面に 'H' 1 文字を表示するというだけでも、実は大変なことなのだ。CPU は画面という装置はもちろん 'H' という文字すら知らない。画面 (VRAM というメモリとして実現されている) 上の表示位置を求め、H のフォント(文字の形、ドットの集まりとして定義されている)情報を読み出して、「1 ドットずつ」点を並べていくしかない。それが「この DATA を画面に表示せよ」と命令できる(ように感じられる)のは、何重にも階層化された間接参照のマジックである。

ちなみに、BASIC では Hello, World! の表示は次の 1 行ですむ。

```
PRINT "Hello, World!"
```

私はコンピュータの「本体」を、ハードウェアにではなくソフトウェアに見ている。極論すれば、ハードウェアはソフトウェアにとっての実現環境にすぎない。ソフトウェアとは要するにコトバである。すなわち、コンピュータとは対象化され道具となったコトバであり、コトバは構造を生む。

くっきりとイメージできる 構造化されたシンボル、つまりコトバに写すことのできる ものであれば、数値・文字・画像・音声.....何でも、原理的にはコンピュータで扱うことができる。ここでコトバに必要な条件は、区別したいものが区別できることと、逆に区別する必要のないものは同一視できることに限ってよい。'1' はプログラムのどこに書かれていようと同じ 1 であり、ハードウェア的にはある閾値を越えている電圧はすべて 0 ではなくて 1 である。

ここまで純化されたコトバは、現在目の当たりにできるコンピュータないしコンピュータ文化に現れている通り、強力な道具である。一方の端を 0 か 1 かの、単純明快でほとんど「硬い」と表現できそうな区別に置きつつ、多重の階層化を経て、他の端は多様極まりない容貌を見せる。しかしその根本には コトバに写し取られた時点で 閉じざるを得ない方向性が埋め込まれていないか。私には、コンピュータは(コマーシャルやカタログで言われているような)新しい世界が広がる道具として以上に、内へと凝集して排他的に自分の色で塗りつぶそうとする自己増殖の増幅器に思える。⁸

⁸ 私はコンピュータを、人間の我執がそのまま形になった道具、と定義したい。ここで我執とは、自分に都合のよい区別をたて、無自覚にその指差しにしがみつ়く態度の謂である。

言語の本能

話題をコンピュータから自然言語に広げてみよう。コンピュータ言語と、日本語や英語といった自然言語とは、何が同じで何が違うのか。

しかし自然言語を関心の中心とすると、コンピュータ言語との比較よりも先に、次の問いが浮かんでくる。私たちはどうやって言語を獲得するのか。⁹

無用な混乱を避けるために、まず「自然言語」が具体的にどのようなものを指すのかをはっきりさせておく。日本語、英語、ハングル、中国語、……が自然言語であることは問題ない。現在の言語学では、日本手話も日本語などと同様な自然言語とされている。¹⁰ また、アイヌ語や琉球語はもちろん、関西方言や東北方言なども独立した言語と扱われる。生れてきた子供が、置かれた環境の中で、自然に身につける言語が自然言語だと思って差し支えない。どの程度異なっていたら別の言語とみなすか、といった点に明確な基準がないのであまり数に意味はないが、世界中では優に 5000 を越える自然言語が用いられていると考えられている。

さて、一般に言語は学習を通じて習得されると考えられているのではなかろうか。ふつうの日本人にとっての英語のような第二言語の場合はそれでもよいが、これからは母語に話を限ることにする。確かに、周囲にその言語を使う人がだれもいないとき、母語として言語が習得されることはない。しかし母語が学習のみで習得されるとするには、大きな謎が立ちはだかるのだ。

言語の発達過程にある幼児が触れる言語データは、非常に部分的で、全文法分野をカバーしているわけではない。多くの間違いや不完全な文も含んでいる。にもかかわらず、子供は信じられないほど短い時間に、無限に近いバリエーションの文が話せるようになる。これは古くプラトンが指摘した問題で、母語の獲得という結果に対し、与えられる言語刺激が貧困であるという事実から、「刺激の貧困」とも呼ばれている。

この謎をあっさりと片付けてしまう考え方が、アメリカの言語学者チョムスキーによって 1955 年に発表された。チョムスキーは、幼児の脳に文法が最初から備わっていると言うのだ。言語は本能的に獲得される！

先に誤解を封じておくと、チョムスキーはたとえば「日本語が話せるようになる遺伝子」

⁹ 以下、個々の話題は主に『言語の脳科学』(酒井邦嘉著、2002年、中公新書)による。

¹⁰ 手話について少し補足しておく、日本では自然言語である「日本手話」と並んで、日本語の語順に従って手話単語を並べた「日本語対应手話、シスコム」の両方が用いられている。シスコムは人工言語的な色合いが強く、文法が不完全で、自然言語とはなり得ていないらしい。さらにテレビの「手話通訳」などに出てくる手話は、日本手話とシスコムとを折衷した完全な人工言語なのだそう。

なお、「日本手話」が自然言語と認められている理由は、日本手話が先天的な聴覚障害者の母語となっているという事実にある。

があると言っているのではない。彼は日本語、英語、日本手話、……、すべての自然言語に通じる「普遍文法」を提唱し、それに対応する「言語器官」が脳にあって、その言語器官が十分に成長することで母語が決定されると考えたのである。周囲で何語が使われているかという環境が、非常に抽象的で言わば「柔らかい」幼児の言語器官のパラメータを特定の言語に向けてセットしていき、それが完了したとき母語が確立するのだ。

チョムスキーによる言語の生得説は、まだすべての言語学者の支持を得ているわけではないらしい。しかし、学習説ではどうも説明できない例を、上掲書から引用しよう。

「1980年代中ごろのニカラグアで、ろうの子どもたちの間で手話が広まっていることが、言語学者の注目を集めることになった。重要なのは、手話を教えてくれる教師が全くいなかったことである。ニカラグアのろう学校の先生はすべて聴者であり、口話法(読唇術と発声の訓練により音声言語を通じて意思伝達を行う方法)によってスペイン語を教えていた。子どもたちは、授業以外の時間に手話の原形となるマイムを使い始めたが、それがしだいにクレオール(二つの言語が混成して新たに生じた自然言語)化しながら、新しい手話へと作りかえられていった。つまり、まわりに言葉がなくとも、子どもたちは言語を創ってしまう能力をもっていることになる。」

(『言語の脳科学』 pp. 279~280)

幼児はみんな、母語を学習して習得するのではなく、自分の置かれた言語空間に合わせて、新たに産み出している。さすがにそこまで言い切っている言語学者はいないようだが、そのようにイメージを広げてみるのも悪くないだろう。

人間には、少なくとも幼児の一時期、結果として言語に相当するものを産み出さずにはいられないような内的衝動がある。母語の獲得が何らかの意味で生得的、本能的だということは、そういうことを意味する。

言語がコミュニケーションのために発達した、あるいは人間の脳が言語を扱えるように進化した、というのはおそらく間違いだ。言語は、人間の脳が進化の過程で偶然ムダな発達をしたとき、そこでの情報処理能力の「余剰」から、無目的に生れてしまった。ところがそれが群れとしての生存にも有益であったために、ムダなことに頭とエネルギーを使うおかしなサルは生き延び、その脳に座を占めた言語も増殖することになる。私はそのように考える。

そのように理解した時点で、コンピュータ言語と自然言語との違いはすでに明らかになっている。コンピュータ言語は、CPUにコマンドを伝えるという目的から出現した。意味は一意に定まらないと困る。ムダは少ない方がよい。本来ムダから生れた自然言語の豊かさとは出発点が違う。「あいまいさに満ちている」ということが自然言語の重要な特徴の一つに挙げられるが、それはあまりにも当然のことなのである。¹¹

¹¹ ここでは対比上、コンピュータ言語を典型例とする形式言語は正確であいまいさがないかのような記述になっているが、実際には形式言語においても「意味」が一意に確定できるわけではない。念のため注意しておく。

一方、文法を主とする自然言語で考えた場合、最大の難点は正確さを犠牲にしなくてはならないことである。自然言語には、先に挙げた「あいまいさに満ちている」という特徴のほかに、「文法は変わりやすい」という特徴まである。¹²

もっとも私は、この自然言語の特徴がまさに、コトバ（単語）に先立って文法（の抽象的な枠組み）があるという言語の生得説を裏付ける証左になり得ると考える。

文法（分節化の規則）と語句との対応は二次的なもので、それゆえ本源的に語句の指差しにはあいまいさがつきまとう。「みにくいアヒルの子」が「みにくい、アヒルの子」なのか「みにくいアヒルの、子」なのかには、文法は無関心で、「おさまりのつく文節化」が完了できさえすれば文法にとってはどちらでもよいのだ。

また、「現代日本語の文法」のような具体的な姿も、文法がたまたま対応を見つけ出した文節化（とその裏の統合化）の規則が、ある社会的・時代的な言語空間の中で弱く繋ぎ留められているものにすぎない。新しい状況に直面するなどして文法の内的重心が変われば、個人においてすら、文法はかなり自由に変動する。¹³

自然言語のこの正確さに対するいい加減さはしかし、「言語として存続し続ける」というここでの問題意識に照らすならば、むしろ長所と言えよう。特定の対象あるいは状況に対して正確だということはそのまま、アセンブリ言語がCPUが変われば新たに作り直されなければならないように、対象・状況が少しでも変わったときには脆弱さとして露呈する。

私は、人間、特に幼児における「言語を生み出さずにおかない本能」の無目的な豊饒さこそ、言語を言語として存続させている原動力だと考える。言語は走者から走者へとバトンが手渡されるように「教えられ引き継がれて」持続するのではない。ある言語活動（の間主観的総体）は、その言語空間へ新たに加わったメンバーの「新しい」言語活動を誘発する。そのような戦略をとったからこそ、言語はしたたかに生き続けているのに違いない。¹⁴

¹² 前掲『ことばの脳科学』に、『ネイチャー』誌からの引用として挙げられている（pp. 20-21）。もう一点、「文の複雑さには上限がない」という指摘もあるが、これは自然言語だけでなく形式論理等における式（=文）にも当てはまるので、自然言語に特有の特徴としては無視した。

¹³ 私自身、年配層と話す場面でいわゆる「ら抜き言葉」になることはないが、高校生・浪人生といった若い世代と会話するとき、場合によってはら抜きを積極的に使う。若年層の、特に女の子に対しては、ら抜きでない正式（？）な言い回しは往々にして「お高く止った」ような印象を与えるようで、「アンタ何様？」のような冷めた受け止められ方をされてしまうことがあるのだ。そのような環境へ必要上「適応」しているうちに、意識して使い分けている、というよりは、状況に応じて体頭？ が切り替わるようになった、とでもいう方が近い。

¹⁴ 神経細胞の軸索上を、信号（インパルス）が減衰もせず歪みもしないで伝わっていく原理にも、似たような点がある。軸索上にずっと並んだ発振器（実体は生体膜中のタンパク質）には、周囲の発振器どうし、多少特性に違いがあっても、互いに同調し合い共同歩調をとるようになるという性質がある（これを非線形性という）。軸索上の一つの発振器が「発振状態」になると、それが隣の発振器の発振を誘発する。このようにして発振状態が次々と誘発されていき、結果として波形は減衰することも歪むこともなく おそらく、より正確には多少歪んでも自動的に補正されながら 神経細胞の軸索上を伝わっていく。

ならば、コトバは文法の単なる影法師にすぎないのか。それも違う。

もし文法が具体的なコトバを得なかったとすれば 思考実験的に述べることしかできないが、文法は自らの豊饒さの中で窒息し、何ももたらさないムダなエネルギー消費はおかしなサルの繁栄につながらなかったはずだ。

私は文法とコトバとはそれぞれ「独立」していると考える。コトバを主に考えたときコトバの上に構築される規則と、チョムスキーの言う生得的な文法とは、実は別のものなのだ。同様に、文法が見つげ出す分節化の対応物と、具体的な指差しをもつコトバとも、実際には重なっているだけで同一ではない。¹⁵

文法とコトバは、どちらが主でどちらが従という関係ではなく、異なる起源をもって別個に生れた。卵から鶏が生れたのも鶏が卵を産んだのもなく、卵と鶏は偶然出会ったのだ。卵と出会った鶏は卵を産むようになり、鶏と出会った卵は鶏に育つようになった。私はそのようにイメージする。¹⁶

ただし、偶然の出会いと同時に必然的な役割分担につながる。文法は柔軟なシステムとして飛翔し、コトバが現実世界に錨を降ろす。一般的な感覚とは逆になるだろうが 事実、ここでのコトバに対応するコンピュータ技術はソフトウェアと呼ばれる 文法は柔らかく、コトバは硬い。変化するのは文法で、コトバは変わらないものとして留まる。

対等で異質な文法 - コトバの協働の上に、言語は言語として成り立ち、存続しているのだ。

言語道断

言語は生きている。

いのちの比喩として、とりあえず要件は押さえられた。しかしもう一つ、無視しがたい表現がある。いわく、言語道断。

一般的には、とんでもない、もってのほか、の意味で使われる。それが「言葉で言い表しようのない」の意味から転じていることは容易に想像されるだろう。本来は仏教語で、「あらゆるものの真実のすがた（諸法の実相）は空であって、言語の道が断え、言葉で表現する方法のないこと（『岩波仏教辞典』）」を意味する。

仏教の立場では、禅で言う不立文字と同様、「言語（概念的把握）の限界」の意味を込めて用いるのが普通だが、これをあえて「言語」に視点を残したまま吟味する。

数字の 0 をモチーフにする。0 は数値がないことを表わしているだけではなく、そこに数値に隠されない「位取り」 数の表記法を支えるシステム があることを、まざまざ

¹⁵ 一応紹介しておく、脳内において、「文法処理」と「意味処理」とは別々の領野において独立に行われている可能性が高いことが、最近の脳科学を通じて明らかになりつつある。

¹⁶ 生物学的にもう少し正確に言うならば、要するに「卵細胞と体細胞は異なる」ということである。

と見せている。言語道断を通じて、言語の「背景」が見えないか。

不立文字を言う禅が、実は饒舌である。『臨濟録(中国臨濟宗の開祖、唐の臨濟義玄の言行録)』
しかり、『碧巖録(臨濟宗で重視される公案 参禅者に示して坐禅工夫させる課題 集)』し
かり。曹洞宗では公案を用いないこともあって臨濟宗と比べればおとなしいものの、道元の『正
法眼蔵』は、内容を離れて言葉の跳躍を楽しむためにだけであったとしても読むに足る一書だ。
禅に見られる饒舌、言葉の自由闊達さ、の一端を具体的に紹介する。(出典は『碧巖録』第十九
則。別の種本を参考に有國が脚色 短縮、現代語訳 した。)

「俱胝一指頭の禅」と知られた、万事指一本で済ませた禅僧があった。「云何なるか是れ仏法の
大意」、指一本。「今日は良い天気でござる」、指一本。

その俱胝の許に小僧があった。いつしか師の真似をして、何でもかんでも指一本。「この頃和
尚はどんな説法せらるるか」、指一本。「和尚の真似ばかりでもつまらぬぞ」、指一本。見かねて、
この様子を俱胝に伝えた者がある。そうと知った和尚、ある日小僧を呼んで
「そなたは仏法を会得しているというが、本当か。」

「はい。」

「云何なるか是れ仏。」

心得た、とばかりに小僧、指一本ズツと齧てる。

ここぞと俱胝、懐に忍ばせたる小刀にてその指をスパツと切り落としてしまった。

「あ痛！」と小僧、悲鳴を喚げて走り出す。

そこを後ろから俱胝、大喝一声「云何なるか是れ仏！」と、指一本。

小僧、ハツと指を示され、ない指を豎ようとして手を挙げた刹那……豁然と大悟するに至った。

饒舌は表面の言語活動だけではないのだ。言語道の断、指差しの指へのとらわれが斬り
落とされたところに……沈黙 それは「言語」の総体と同じ拡がりをもつ が雄弁に
響きわたる。¹⁷

言語の背景には、沈黙の豊饒があったのだ。

以上で必要なイメージが揃った。あらためて総合的に、いのちの比喩としての言語を整
理してみたい。

中心には「文法」を据える。文法を二重の意味で「翻訳系」と位置づける。

文法による開く方向の翻訳は、既存のもの新しい現実への適応という形をとる。この
とき文法は統合的に働く。

ポイントをはっきりさせるために、まず、これまで曖昧にコトバとして取りあげてきた
ものを「情報」と限定してとらえ直しておこう。

¹⁷ 『維摩経』には、不二の法門に対する解説を求められた維摩が「沈黙」をもって答え、古来「維摩の一黙雷
の如し」として知られるくだりがある。あるいは、釈尊が他の思想家達から世界は常か不定かなど十四の形而上
学的な論争を挑まれたとき、沈黙を守って返答しなかったとされる「十四無記」も連想される。

「情報」の語義

事物・出来事などに関する知らせ (news)

ある特定の目的について、適切な判断を下したり、行動の意志決定をするために役立つ資料や知識 (information)

機械系や生体系に与えられる指令や信号 (code) (『大辞林』、英訳語は一部追加)のうち、基本的には「技術的情報」の意味内容 (message) を切り離して符号 (code) のみを取り出したときの情報に重心を置く。しかし「指差し」のイメージを支えるに足る程度の情報 - 内容の対応関係や、構造につながる階層性を含めて考えているので、その information (あるいは intelligence) にも重なる。

情報は二分法に立脚する単純な「区別」の体系で、それ自身は変化せず¹⁸、また単独では意味を持たない¹⁹。

情報の意味は、具体的な状況へ「翻訳」されることによってはじめて、流動的に確定される。この翻訳は連鎖的に起こり、「動的定常状態」に至って背景へ溶け込むことで、背景をも静かに変性させていく。²⁰

閉じる方向の翻訳は、孕まれた可能性の現実化・具体化といった姿で現れる。ここで文法は分析的に働く。

もやもやとした思いや感情が言語化される時のように、産業革命の最^{さなか}中原動機の開発からエネルギーという概念が定式化されたように、あるいは遺伝子の突然変異の集積が進化と解釈されるように、熟した可能性は、新しい情報を生み出す。それに伴って分節化のシフトが起こり、文法 = 翻訳系自体も変容することになる。

このとき翻訳 = 分節化されて情報 (言葉、数式、遺伝子、……) に具現するのは、背景なる豊饒である。この豊饒の漲りを「黙」ととらえてみたい。

言語を通じて、「情報 翻訳系 黙」という軸が取り出せた。この軸によって総合的にとらえることのできる動的メカニズムを、ここに「自己保存系」として提示する。

¹⁸ 情報はめまぐるしく変わる、といった印象があるならば、半分は情報の意味、あるいは時間軸を持ち込んだ (時間とともに価値が変わるような) の意味に引っ張られているせいであり、もう半分は (ここでの意味の) 情報は「置き換えられ得る」データを上書きするときのようにためである。

¹⁹ 情報には「翻訳者」が不可欠である。ゴキブリにとって決定的な意味をもつフェロモンも、一般の人間にとってはその有無さえ知覚・関心の外にある。

²⁰ このくだりは実証された学説などではなく、私の個人的な感慨である。実際には情報はさまざまに翻訳され得る。しかし可能な「翻訳」のうち、連鎖的に続く一連のものだけが意味として浮かび上がってくるのだろう。意識にのぼった解釈の裏で、膨大な数の選択肢が切り捨てられているに違いない。意識・無意識をひっくるめたその営みの総体を、私は仏教で言う^{いこう}意業ととらえている。私には、私がここで何かを「意識」していることがすでに、宇宙を汚しているというふうに感じられる。

三 自己 重層的同一

方程式

中学校の数学で、方程式を習う。ところで「方程」とは、中国漢代の数学書『九章算術』で連立一次方程式を指した。方^{ならべ}て程^{はか}る(比べる)という意味だったらしい。しかし「方程式」という用語は、単に連立方程式に留まらない内容を表しているとも考えられる。等式がならべられていると見れば確かに連立方程式だが、左辺と右辺が等号でつながれていると見るならば、等式そのものの成り立ちを的確に表現していることになるからだ。

2つのものを並べ関連づけるというのは、思いの外大変な出来事である。ここでは話を等号「=」に限定して、高校までの範囲で等号の実際の使われ方を振り返ってみよう。

小学校の間は、電卓の^{イコール}「=」キーと同じで、事実上「計算をして、答を出しなさい」という意味で用いられている。¹

等号本来の意味に重ねて解釈すれば、複雑で直感的には捉えにくいものを、より単純なものとして「同一視」して把握・納得するという一連の出来事が、「そのように思考しなさい」という指示として、「=」で象徴されているのだろう。= を「は」と読むのも、そう考えると興味深い。

助詞の「は」は、未知あるいは新たな話題を提示する働きをもち、その後には既知な内容、あるいは提示された新たなものを定位するに足るだけの具体的な記述が続くことが期待される。

中学校で、数概念の整理をした後、正式に「等式(左辺と右辺が等号でつながれた式)」が登場する。

具体的には、等式の性質として

(1) $A=B, B=C$ ならば $A=C$

(2) $A=B$ ならば

(ア) $A \pm C = B \pm C$ (複号同順) (イ) $AC=BC$ (ウ) $\frac{A}{C} = \frac{B}{C}$ ($C \neq 0$)

といったことを学習する。

なぜこんな「当たり前」のことを大仰に(あるいは、わざわざわかりにくく)扱うのか、と言いたくなってしまいそうだ。しかし、当たり前に見えることが実は当たり前でないことは多い。実際、方程式の解法を体系的に扱う上で、等式の性質は不可欠なのである。

補足しておく、上の等式の性質は一般に「証明」することはできず、ふつう「約束(公理)」

¹ 実際に小学校算数の教科書で確かめてみると、実際には等号より先に「大きい、小さい」を表わす不等号 < (>) が紹介され、それに続いて「等しい」ことを表す記号として等号 = が出てくる。「(ちょっと)違う」がなくなったところが「ピッタリ同じ」ということか。

なお、当然ながら、「計算しなさい」のような意味があるという説明はどこにも出てこない。

として導入される。厳密には、

(ア) $a=a$ (反射律)

(イ) $a=b$ ならば $b=a$ (対称律)

(ウ) $a=b, b=c$ ならば $a=c$ (推移律)

の組み合わせを「相等の公理」(これは事実ではない。人間知性の「創造」か、そうでなければ「啓示」だ)と言い、また等式の性質の(2)は独立に「相等と計算の関係」と呼ばれる。

ここで、「同じ」と「等しい」とは違うことに注意して欲しい。「等しい」とは「同じ」とみならずことであり、必ずしもまったく同じことではない。まったく同じ、というならば反射律 $a=a$ 以上のことは言えず、それでは何も生み出せなくなってしまう。本来異なるものを「等しい」と断定して関連付けるところに、等号に出現した豊饒がある。

方程式では、与えられた状況の中に隠されている関係を、未知数 x を用いて等式として取り出すことが出発点になる。あとは、得られた複雑な等式を、等式の性質に則って右辺と左辺が等しいという「関係」を保ちながら $x=2$ のような簡単な等式へと変形し終われば、未知数の値がわかり、方程式が「解けた」ことになる。

小学生にとっての「 $=$ 」が持っていたような推進力(計算、ないし式変形を「したくなる」動機づけ)は、等式間の「同値」変形へと、1つ上のレベルに移っている。2つの等式が同値であることを記号「 \Leftrightarrow 」で表わすと、実際にはたとえば

$$\begin{aligned} 2x+3 &= 4x-1 \\ \Leftrightarrow 2x-4x &= -1-3 \\ \Leftrightarrow -2x &= -4 \\ \Leftrightarrow x &= 2 \end{aligned}$$

のように計算(式変形)が流れていく。等号はもはや動的には働きかけてこず、正当に「左辺と右辺が釣り合っていることを象徴する支点」として静かに落ち着いている。このとき、2つのものが等しいという「関係」が対象化されている。

意識されることは少ないと思うが、実は中学校の間にもう一つ、答案を書く過程などで「定義」あるいは「代入」に相当する内容も等号を用いて表すようになっている。

たとえば2乗の展開公式 $(x+y)^2=x^2+2xy+y^2$ を利用して $(a+b+c)^2$ を展開するときには、置き換えを用いて次のようにする。

$a+b=A$ と置くと、

$$\begin{aligned} (a+b+c)^2 &= (A+c)^2 \\ &= A^2+2Ac+c^2 \end{aligned}$$

置きもどして、

$$\begin{aligned} &= (a+b)^2+2(a+b)c+c^2 \\ &= a^2+2ab+b^2+2ac+2bc+c^2 \\ &= a^2+b^2+c^2+2ab+2bc+2ca \quad (\text{計算終了}) \end{aligned}$$

一番上の $a+b=A$ という式は、新しく A というシンボルを文字列 $a+b$ と同等な（いつでも交互に入れ替え可能な）ものとして導入しているのであり、厳密に考えれば等式とは意味合いが異なる。（このあたりの事情にこだわれば $A=a+b$ と書いた方が座りがよい。 $a+b=A$ の A は「述語」だが、 $A=a+b$ の A は「主語」と感じられるからだ。さらに、このような場合には $=$ ではなく $:=$ を使って $A:=a+b$ と書く流儀もある。）

ここで重要な点は、等号 $=$ がこれだけ幅のある出来事を「同じ印象で」表してしまっているということである。その理由を、私は等号が同定という原初的な「判断」を記号化したシンボルであるからだと理解している。

高校に入ると、等式のバリエーションとして恒等式を学ぶ。それにより、（文字を含む）等式が恒等式と方程式に整理される。

式中の文字がどのような値を取るかに関わらず、恒に成り立つ等式が恒等式であり、式中の文字が特定の値を取るときに成り立つ（こともある）等式が方程式である。（恒等式を一般の等式と区別したいときには、 $=$ に代えて \equiv を用いる。）

高校の範囲までの等号の用いられ方を網羅するには、さらに物理や化学の「公式」における等号にも触れておく必要があるだろう。これらの等号は（仮説理論における）定義、すなわち見出されたある「因果関係」の記述のために用いられており、その関係式ひとつが、場合によっては新しい理論世界全体の礎石になっていることもあるのだ。

ニュートンによる古典力学の大部分は、 $F=ma$ という式（ニュートンの運動方程式、加速度 a が力 F に比例し、力と同じ方向をもつこと、またその比例定数は物質の質量 m であることを主張する）の上に構築されている。

コブラ

方程式（等式）は、同定という「判断」が対象化されたものである。判断は言語 - 論理的な活動だ。そう考えて振り返ってみると、実際、言語の中に等号 $=$ の対応物を見出すことができる。英語の場合の *be* 動詞だ。²

be 動詞は文法上（より正確には論理学上）連結動詞（copula）と呼ばれ、非常に特殊な働きをする動詞である。もし仮に、言語が具体的な動作や状態の記述のみのために用いられるとするならば、*be* 動詞はなくてもおそらく用は済むだろう。しかし逆に「*be* 動詞がない」状態を考えてみると、言語の機能は大きく制限されることになる。たとえば「蛇」と「危険な動物」とを同定する「判断」が、確固とした表現としては支えられなくなってしまうのだ。

² 日本語では、*be* 動詞で象徴される文法的な機能が「語」としてくっきりと表に出てこない。*be* = 「です・だ」のように理解している人が多いと思うが、「です」も「だ」も助動詞（非独立語）であり、述語が形容詞のときには用いられない（例：*この花は美しいだ。この花は美しいです。この花は美しい。）など、*be* と「です・だ」を同レベルで扱うには不都合がある。そのような理由でここでは *be* 動詞を取り上げた。

英語では、補語に名詞を取る動詞は限られる。(一般的には補語は形容詞であると考えて差し支えない。)そして複合的な内容をもつ名詞句や名詞節となると、補語にできるのは be 動詞のみである。そのことから、be 動詞が同定判断という重要な言語 - 論理機能のために特化した語であると言えるだろう。

本来異質な2つのものが併置され相互に同定されたとき、ある始原的な判断が対象化され、一人歩きを始める。ここで「対象化される」とは、その内的な構造が問題にされなくなり隠されてしまうことを意味する。大胆に言い切るならば、併置されている二者のいずれとも袂を分かち新たな地平に、忽然として何かが生れ出すのだ。

この「新たな地平」は、物理的な意味での実世界とは独立している。その根元において言語 - 論理的に拓かれた地平であり、私は本来無時間的な世界であると理解している。³

ここまで等号とコブラに焦点を当てて議論を進めてきたが、等号・コブラは前景の雑音が少なく背景が見やすい主題というにすぎない。あらゆる数式、あらゆる言語表現、あらゆる判断、つまりはあらゆる思考ないし「知的な」活動において、今問題にしている事情は変わらない。私は、私が人間である限り、そして私を私と自覚した時以来、第一義的にはこの本来無時間的な世界の住人なのである。そしてこの世界の最初にして唯一の住人が、私なのだ。

思わず話が大きく飛躍してしまった。飛躍のバネは、私が私を私と自覚しているとき、その「私」は同定的な判断が対象化されたものだ、という解釈にある。話を多少なりともたどりやすくするために、今後ここでの意味の「私」を「自己」と呼ぶことにする。

無から有は生れない。自己の実体が同定的な「判断」だとするならば、その判断において並べ関連付けられているもの、自己という「等号」の両辺は何か。それを、まず身・心ととらえてみる。

ただ、自己は対象化された身・心間の同定判断である。自己と身・心は別の地平に住む。自己に生の身心は見えない。身心を「考えた」としても、その身心は自己に先立ち自己を支えるに足るものではなく、自己によって新たに生み出された(判断された)ものなのだ。自己の側から見るとき、自己はまさに無根拠で絶対的な「同一性」として顕れる。そして自己には自己の側から見る以外に「見る」術はない。自己は、孤立している。

デカルトが「我思う、ゆえに我あり」と言ったとき、彼はこの言語 - 論理的な地平における自

³ 文法で言う「時制」も、上のように考えると納得できる。過去・現在・未来といった時制の中で、最もとらえにくいのは実は「現在」時制だ。現在時制は、物理的な「現在」の表現ではない。(英語の場合、「今」起こっている出来事を表すには現在「進行形」にする必要がある。) I eat apples. は「私は(習慣的に~よく)リンゴを食べる」、「私はリンゴを食べることができる(≒好きだ~嫌いではない)」といった意味で、今食べているかどうかには無関係である。(単純な)現在時制は、今実際に起こっているという意味での事実を離れた、「論理的」な拡がりを見せているのだ。

己の絶対性をとらえたのだ。その限りにおいてデカルトは正しい。しかし彼は、自己の住む地平が言語 - 論理的に「新たに」拓かれたものにすぎないということを見損なっていたのではなかろうか。ひとたび生まれ出た自己にはその地平を超える目が持てないとしても、それは自己の地平が唯一のものであるという証明にはならない。自己の地平の限界を知りつつも、「もの自体を知ることではできない」とその向こうの地平への信頼を託したカントの方が、より深く自己を「感じて」いたと思う。

なお「絶対」を、古くは「絶待」と書いた。「相待」すなわち「相待ちて成る」道の断たれてあることの謂である。自己の絶対性とはその響きで、私としては超越性、優越性といったニュアンスは含まずに用いている。

自己がどのようなものか、もう少し簡単に肉付けしておこう。

一つ。動物に自己はない。自己は対象化された同定判断である。同定が成立するには、先行条件として2項が「言語 - 論理的に」定位されている必要がある。犬が指差しを理解せず、チンパンジーといえども文法能力を持たない以上、動物に自己が立ち顕れる契機は、その根において断たれている。⁴

もう一点。逆に人間にとって、自己の地平のみが唯一の棲家ではない。言い換えれば、人間は言語 - 論理的世界にのみ生きているのではない。自己は絶対的な「同一性」としてほとんど常に私の前に立ちふさがっているが、その同定判断を「保留」し、積極的にはぐらかす道は残されている。そのようなアプローチは論理的にではなく身体的に支えられる。

精神 - 思想史的に、「自己」が現代のような確固とした地位を得るにはかなりの時間がかかったと思われる。パルメニデス（紀元前5～6世紀）と共に誕生し、デカルト（17世紀）において成人した、といったところか。「人」は、自己とよりもはるかに長い時間を身体と共に生きてきた。それは様々な領域に、伝統として残されている。

自己に隠されて身体が見えにくくなったのは、ごく最近の出来事だ。

つむじ

自己は身 - 心の相関の上に成り立つ同定判断であり、身・心を根とする。しかし顕れる限りの自己は絶対 - 孤立的に顕れ、自己に生の身・心は隠される。身は、そしてまた心も、一方では物質 - 物理的な現象としてまた他方では進化 - 発生的な過程の積算として、時空の内に時間・空間（歴史・環境）を内化して棲むが、自己は言語 - 論理的な地平に、時間を離れて、ある。

この章のこれまでの議論を要約すれば上のようになる。しかしこれで自己は尽されてい

⁴ 犬が主人を見分けるように、動物も非言語的な（おそらく記憶 - 学習による）同定はしている。しかしそれは be 動詞のない言語世界の思考実験で触れたように、出来事の単なる（構造化されない）堆積にすぎず、人間にとっての自己とは位相が決定的に異なる。

るか。

おそらく、生れることはできるだろう。しかし上の把握だけでは、生れた自己はまだ自己として完結できない。素材としての身心も、機構としての論理も、自己の必要条件であって十分条件ではないのだ。

まっさらな地平に、忽然と自己が生れたとしよう。

その地平そのものが、自己である。その地平に目をおく限り、自己は無から生れる。

生れた自己が動かぬならよい。生れたという事実の内に、自己は自明^{トリビアル}に完結している。しかしやがて自己は動き出し、自らの地平を自身の住み着く「世界」として構築し始める。

自己が「動く」とは、言語化すること、言語的に思考することを指す。⁵ 人間も動物である以上、ある風景^{ランドスケープ}の中に自身を位置づけている。風景を解釈し直しあらたに意味づけを施して、風景に塗り重ねられるように構築されていくのが、人間にとってユニークな「世界」である。やがて世界は風景を覆い隠し、風景は無意識の中へ沈んでいく。

自己が世界を構築する素材は、一次的には身体という感覚・運動器官によって得られた外界の情報である。しかしそれら一次素材は、言語という間主観的な加工装置によって色づけされており、さらに感情という重みづけ機構^{クオリティ}によって質感を付与された上で、自己の地平に配置される。⁶

ところが世界の構築が進んでくると、根元に潜む問題が徐々に抜き差しなくなってくる。

自己と違い、自己に一次的な素材をもたらしている身体は、時空に縛られている。無根拠・絶対の同一性が本性である自己にとって、身体の変容は理解しがたい。さらに決定的に、身体の変容の先には「死」が控える。身体の死は、自己にとっては何なのか？ 自己は原理的に死ねないのだ。

もし、論理そのものに死と類比可能な側面が内在されていたならば、すなわち「自己」自身が死に得るものであったならば、死は技術の問題にすぎなくなる。人は死について、たとえば引越し先でどうしようかという以上には悩まないはずだ。身体の死は、自己の不死性をあぶりだす。至って皮肉なことに、自己の不死性が、自身の無根拠であることを自己につきつける。

さらに言語を通じては客観 - 主観の断絶が、感情によっては衝動 - 合理の裂け目が、自

⁵ 個人的なイメージでは、集合を表す記号「{」と「}」を「書く」操作を連想する。前段落の「生れた」だけの自己は空集合 { } に相当する。

⁶ これまで感情については主題として触れていないが、身体内・外の状態に特定の眺望^{パースペクティブ}を与え、常に行為の「選択」に備えている一種の中央監視機構^{モニタリング}の出力、といったイメージでとらえている。

言うまでもなく、この中央監視機構は「こころ」の比喻である。しかし、一方で身体とこころを同列に置いている点と、他方で「理性的・合理的」と形容され得るような側面を「自己」の地平に斬り分けていることとに注意して欲しい。動物にも通じるような、素朴^{フイブ}なこころ（自身が有機的な統合体であることを漠然と感じているような、言語以前の統一感）である。

己の構築した世界に密輸入される。己が宙に浮いた地平に坐を占め、身体・言語・感情がそれぞれ本来の帰属場所を持っている以上、食い違いは原理的に避けられない。そしてそのいずれもが、己の無根拠を騒ぎたてる。

実は自己にとって、無前提の同一性は自らの本性である。無根拠をつきつけられること自体は自己にはこたえない。無根拠であっても自己であることはゆるがない。最大の問題は、己の無根拠のあばきたてが、己の知り得ない「他」を暗示していることにある。己は絶対（絶待）の同一性であり、他に会わない。しかし……他なくして自たり得るか？

頭の^{てっぺん}天辺には、つむじがある。日本人では1個の人が多いが、サルも含めて霊長類全体で考えると一般には2つなのだそう。5つ以上つむじのある人もいるという。ところで、つむじの「ない」人はいるだろうか。

生物学を無視して、人の「頭部」だけで考えれば、理論的には可能だ。しかしこれは「顔（毛の生えていないところ）」があるおかげで、もし顔を含めた頭部全体に毛があると無理になる。試しに、ボール全体に毛を生やしそれを寝かすことを考えてみるとよい。どんなに工夫しても最低2つ、つむじができないことにはすべての毛を寝かすことはできないことがわかるだろう。

つむじのように、ある原理や原則を全体に適用しようとしたとき、つじつまが合わなくて残ってしまう点を特異点という。

己の構築する「世界」を仮に球でイメージし、己の「動き（同定判断を出発点にした、論理 - 言語的な整合性の敷衍）」を毛の流れになぞらえてみるとわかるように、己が動いたとき、世界には不可避的に特異点ができてしまう。というよりも、世界の中心において静かに世界を眺めている己の視座そのものが、実はすでに特異点なのだ。⁷

特異点は何を意味しているのか。あるいは「動いた己が不可避的に特異点を生む」という出来事自体⁸は 何を示唆しているのか。

もう一步、比喩に頼って話を進めよう。ヒトをはじめ高等動物の目で、網膜上の視細胞は、なぜか視神経を眼球の内側に向けて出している。視覚情報は外に出ないと困るので、網膜の内側表面を^は這って一点に集まった視神経は、そこで眼底を貫いて眼球の外に出る。

⁷ 自己にとっての成立原理が（同一性という）論理的な性質のものであるとは言え、厳密な形式論理である必要はなく、世界全体もきちんと原理・原則に基いて構築されはしないので、必ずしもくっきりと特異点が現れるわけではない。しかしそれは特異点が曖昧になっているだけで、特異点が「ない」ということとは異なる。

また、己の視座といえどもおそらく単一ではなく、多数の視座を調子よく渡り歩いているというのが実情だろう。しかし自己にとっては常にそのとき自分のいる地点が世界の中心であり、唯一絶対の視座となっている。

⁸ ラッセルの発見した集合論のパラドックスをモチーフにしている。詳細は省略するが、本質的にうそつきのパラドックスと同じ内容で、どのように工夫しようとも、そもそも「考え始めた」時点（空集合が作られた時点）で根元的な「矛盾の種」がしのび込んでおり、隅から隅まで首尾一貫した「世界」は構築できないことが明らかになっている。

解剖図などで目玉の後ろにひものようについているのが、その束になった視神経だ。ところで、視神経が集まって眼球の外へと向う網膜上の点には、視細胞が配置できない。それが「盲点」であり、盲点に像を結んだ対象は見えない。が、「見る」という出来事が成り立つために、盲点はなくてはならないものなのだ。⁹

自己はあくまでも絶対の同一性として顕れ、他と出会うことはない。しかし、動いた自己は自身の世界の内に不可避的に特異点を生む。特異点は一見同一性の破綻のように思えるが、穴が開くのは世界であって、自己の同一性にほころびは生じない。自己が特異点＝世界の穴を、直接見ることはできない自らの「外」と評価するならば、自己単独では叶わぬ自身の「限定」が実現される。特異点の存在は、十分条件になり得るのだ！

悪人正機

「善人なほもつて往生をとぐ、いはんや悪人をや。」

『歎異抄』第三章の一節である。おそらく、日本人一般に最もよく知られている仏教文献のひとつと言ってよからう。

しかしそのことは同時に、最も広く「誤解」されているテキストのひとつ、とも言い得る。合理的に理解しようとするれば、「自分のことを漠然と善人と思っている人でさえ救われるのだから、自分が悪人でしかあり得ないことに気付いている自省意識の強い人は当然救われる」といった解釈になるのではなからうか。

与えられた一つの文を、常識的な語彙に照らして日本語として正当に受け止める営みとしては、この解釈で真っ当だと思ふ。しかし引用した一節は、残されている膨大な親鸞の著作・言行録の一片断である。¹⁰ 他の文献との有機的なつながりの中でとらえたとき、上の解釈では親鸞の真意から大きくずれてしまうことがわかる。

直接の背景となるのが、中国浄土教の大成者、唐の善導による『散善義』の中の「深心釈」とよばれる一節である。¹¹ 親鸞もその主著『教行信証』にこれを引いている。いわく、
「深心といふは、すなはちこれ深信の心なり。また二種あり。一つには、決定して深く、自身は現にこれ罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかたつねに没し、つねに流転して、出離の縁

⁹ 実際にはイカやタコのカメラ眼、昆虫の複眼など、視神経が最初から外へ出ている視覚器もあり、またそもそも眼はいずれにせよ感覚器で、最初から眼の「外」があることが前提になっている。きちんと考えれば、盲点の比喩はここで持ち出すに十分適切なものではない。むしろ、盲点が見るために必要だという表現上のインパクトを伝えようとしている。

¹⁰ 『歎異抄』は親鸞の著作ではなく、関東在住の門弟　もつとも、親鸞当人は「弟子」といった考えを持たなかったが　の一人、唯円ゆいえんの作とされている。しかし内容からして、親鸞その人の「語り口」を伝えたものと受け止めて大過ない。

¹¹ 『散善義』は浄土三部経の一つ『仏説観無量寿経』の注釈書で、「深心釈」とは同経の中に出てくる「深心」という言葉に対する「註釈」という意味である。

あることなしと信ず。二つには、決定して深く、かの阿弥陀仏の四十八願は衆生を摂受して、疑なく慮りなくかの願力に乗じて、さだめて往生を得と信ず。」

深心を二種の深信に解釈してあることから、この内容を「二種深信」と呼ぶ。一つは自身に対する深信で、これを「機の深信」¹²といい、二つは阿弥陀仏の本願に対する深信で、これを「法の深信」という。

二種深信を下敷きとすることで、悪人が「機の深信」と対応するものであることがわかる。¹³ さらに機の深信は、「法の深信」と対になって初めて意味を持つということも理解してもらえよう。

とすると、後は「機の深信」と「法の深信」とがどういう関係にあるのかが問題である。機の深信（深い自己反省）があって法の深信に至るのか、二つの深信が相俟ち支え合うのか、それとも法の深信が先立ちそこから機の深信が生れるのか。

親鸞著述の『愚禿鈔』には、上と同じ善導の深心釈を引用した後、「いまこの深信は他力至極の金剛心、一乗無上の真实信海なり¹⁴」と親鸞本人によって釈されている。親鸞においては、機の深信・法の深信は全く区別されておらず、ただ深信であって、しかもそれは「他力」に帰するものであることが読み取れる。

親鸞は、「自己省察」のようなあてにならないものには全く注意を払っていない。では、ただ「深信」とされているものは法の深信か。実はそれも違う。

身 - 心が無根拠に同定されたとき新たな地平に自己が忽然と生れ出したのと同様に、機の深信と法の深信とは相関して、新たな一つの「深信」に成就しているのだ。一つの深信が「私」の上に実現したとき、その同じ深信が、一方では機の深信と、そして他方では法の深信と味わわれる。結局、少し上で措定した二つの深信の関係はどれも間違っており、機の深信と法の深信とは「同じ深信」だったのだ。

機の深信と法の深信とが同じ「深信」と気付かれたとき、その同定判断は新しい「自己」を啓く。深信すなわち自己である。身 - 心の同定から生れた自己が動物から人間への飛躍とするならば、機の深信 - 法の深信の同定による自己は、仏の願いの「この私」への降臨である。ここに自己は、全宇宙に抱き包まれて、充足し、完結する。

自己の動きが不可避的に生んでいた特異点は、豊饒なる宇宙の漲りが自己へと実現する断層でもあったのだ。

¹² 「機」は仏教語として本来「素質」を表し、浄土教関連では阿弥陀仏の救済の「対象・めあて」となっている機根の意味で用いられる。本章冒頭の『歎異抄』の一節の内容も、一般に「悪人正機（悪人こそまさしく阿弥陀仏の本願に救われる対象である）」と呼び習わされている。

¹³ つじつまを合わせるならば、「善人」は他力の信心に出逢っていないままの、自分が迷っていることにすら気付かされていない凡夫、ということになる。

¹⁴ 「他力」も「一乗」も、要は「阿弥陀仏の働き」を指す。

親鸞の肉声は、唯円に「自分が何者かわからず腰の浮いている者でさえ、いつか(無限劫の果てに)は一人前になっていく、(仏の願いが届いて)身の程を知り充足した者こそ、すでに立派に一人前ではないか」と響いていたことだろう。親鸞の言う悪人は、^{しか} ^{つら} 響め面しい自戒などではなく、^{あふ} 溢れ出る充足の喜びなのである。

親鸞を離れ、改めて自己の全体像を整理しなおす。機の深信 - 法の深信 をどう敷衍するか難しいが、強引に 有限 - 無限¹⁵ としておく。

身心の同定から、自己が誕生する。これを次のように表してみよう。



身 - 心の属する地平を、「モノの地平」¹⁶ と呼んでおく。そしてそれとは異なる地平に、自己は無根拠かつ絶対的に忽然と現れる。自己の地平を、「コトの地平」と呼ぶことにする。

自己の本性は言語 - 論理的な同定判断であり、自身を世界の内に定位していくが、「一番大きな自然数」が確定できないように¹⁷、原理的に自己規定(自己の世界の「輪郭」の記述)ができない。

一方、判断という自己の動きそのものが、不可避免的に世界の中に特異点を生み出す。その特異点を通じて、というよりもむしろ自己自身が特異点、すなわち有限と無限との接点として再同定されたとき、自己を規定する新たな地平が啓かれる。これを「メタの地平」¹⁸ と呼ぼう。



以上、自己を通じて モノの地平 - コトの地平 - メタの地平 という垂直軸を取り出すことができた。それを貫く自己のあり方を、重層的同一ととらえることにする。ただ、自己に見えるのはあくまでもコトの地平だけであることは忘れてならない。自己が「生まれる」という出来事の中にモノの地平が、同じく「充足する」ことにおいてメタの地平が、示唆され、信頼される。他と出会い得ないはずの自己が、自己が自己であることにおいて、他に出会われていたのだ。

¹⁵ 私はここで、「無限」だけでなく「有限」も、此土には属さない彼岸の(超越論的)ものであるととらえている。彼岸に照らされぬ此土にあるのは、不安な無限定だけである。

¹⁶ 身心をモノの地平に置くことには、ためらいがなくはない。しかしこの章の最終的な目的が、いのちの立体的な記述に向けての垂直な軸を取り出すことにあり、「物質」と「生命」とを区別すると、垂直軸自体の内的必然性に一貫したものを見出しにくくなる。ここでの「モノ」は、物質と生命とを包含していると解してほしい。

¹⁷ 「一番大きな自然数」を仮に G とすると、 $G+1$ も自然数であり、かつ G より大きい。判断はこのように常に広がり、果てを持たない。

¹⁸ メタの地平は、自己が自己としてあること、自己の存在そのものが、へそとして反照する地平である。

四 いのちの位相

腑分け

いのちをめぐる様々な問いを、有機的に、かつ無用な混線を避けて定位したい。それが本書をまとめようと思いついた動機である。しかし「有機的に、かつ無用な混線を避けて」というのは、掲げるにはよいが実行するにはやっかいな課題だ。少なくとも、同時に並行して記述するのはつらい。

いのち・命・生命・…… いろいろな表し方ができる中、本書でこれまで「いのち」としてきた理由は、考えられる表現の中で最も限定がゆるく、多面的な内容を盛り込む上で都合がよかったからである。しかしここからは逆に、この響きのやわらかさが障害になる。

ここで、一旦「有機的に」を離れる。いのちのやわらかさを^{ことさら}殊更に無視して、言わばイノチの腑分けに手を染める。

そこまで断った上でなお、もう二点注意しておきたい。

一つは「腑分け」そのものにまつわる事態である。たとえば、解剖学的に「肛門」とはいったい「何」を指すのか。見えるのは、直腸の末端部、それに連なる皮膚の陥没部、肛門周囲の括約筋、……だけのはずである。肛門を見るには、周辺部の細かいつつま合わせには目をつむり「あれ」と指差して示すしかあるまい。つまり、腑分けは「言語的な」作業 意図的な分画 なのだ。

二つ目は対象の特異性からむ、方法論の選定についてである。私は、いのちは自己相似的な姿をしている。つまり、いのちの「ある部分」を子細に腑分けしていくと、また最初と同じような構造が現れてくる。と考えている。その理解に立てば、倍率(分析の緻密さ)はあまり意味を持たず、むしろ視野角(どれだけのものを見渡すか)の方が重要になる。

腑分けに当たっての準備はすでに整っている。第二章、第三章で取り出してきた軸を組み合わせるだけでよい。その際「無用な混線を避け」る必要があるのは、第三章における三つの地平だ。したがってまずモノ・コト・メタの地平を分け、各地平の内部において 情報 - 翻訳系 - 黙 に対応する構造と、その連絡を見ていくことにする。

モノの地平

モノの地平は、第三章の枠組みでは身 - 心の帰属場所であった。しかしここではより広く、物質 - 生命現象(ただし、ヒトという生物種にユニークな「自己」という側面は除く)が主役となっている舞台としてとらえる。

とは言え、物理学~生物学が対象としているフィールドの広がり比べると、悲しくなる位に小さい領域をカバーするにすぎない。

理由の一端は、生物学を切り離した物理 - 化学的な出来事の中に、「いのち」の比喩となり得

る主題を見出せないことにある。

たとえば「自己組織化」という概念がある。ランダムに動き回っていた水の分子が、温度が氷点以下に下がったとき、きれいに整列して氷の結晶となるのも身近な自己組織化の例だ。これを、あたかも水の各分子が「意志をもっているかのように」イメージできなくはない。

あるいは、「非線形」とは入力に対して出力がきれいな比例関係とならない状況を指す。天気
の長期予報がはずれるのは大気
の非線形性のいたずらだ。非線形な現象では、対象領域内の各要素 エージェントと呼ばれる が「互いに影響し合っ」ていると解釈できる場合がある。

自己組織化、非線形に「非平衡系」 簡単に言ってしまうえば開いたシステム、つまりもっとも
もありふれた動的定常状態（第一章）を指す を加えれば、物理学とも関わる「複雑系」の三
大キーワードになる。

しかし、強引に複雑系を物理学の全権大使としていのちの比喩に立てたとしても、おそらく話
は顛倒する。複雑系は、最大限に評価したとして物質から生命への飛躍の必要条件に関わるもの
であり、十分条件には触れ得ない。有体ありていに言って、物質と生命は「質」が違う。

ならば、せめて物質と生命との不連続点の描写が欲しい。しかしそれすら、不連続点の向こう
側 物質の側 にいのちの比喩が届かない以上、本書で支え得る視野角を超える。

そのような事情から、モノの地平と言いながら、物理 - 化学が直接の対象としているような領
域は落ちている。それをあえてモノの地平と呼ぶ理由は、生物学の守備範囲に重心を残しつつも
.....不連続点のこちら側ぎりぎりまでは見切ろうという思いからである。

物質 - 生命現象における 情報 固定された区別で、かつ自身を複製し得るもの
の対応像イメージは簡単に見出せる。言うまでもなく、遺伝子である。

念のために関連する用語の確認をしておこう。

まず、遺伝子とは機能を中心に見た用語で、個々の遺伝形質（えんどう豆の種子が丸形かしわ
形かなど）を起因する因子、を意味する。

すべての遺伝子は、染色体上の定まった位置に配置されている。染色体は細胞核内の構造物で、
顕微鏡的な用語とでも言えようか。

染色体の実体は DNA（deoxyribonucleic acid、デオキシリボ核酸）という高分子有機化合物
である。DNA はひも状の巨大な分子であり、DNA から見れば遺伝子は DNA の一断片というこ
とになる。（ヒトには約 4 万の遺伝子があるが¹、それらをすべて合わせても全 DNA の 5% ほ
どにしかならない。残りは遺伝子としては働いていないただの DNA である。）

さらに、ある生物種が成立する上で必要最小限の遺伝子を含む染色体の一揃いを、ゲノムとい
う。生殖細胞（卵子・精子）以外の通常の体細胞は、2 組のゲノムをもっている。

なお、遺伝子が「遺伝」に関わるのは生殖細胞においてのみであり、体細胞では遺伝形質の「発

¹ 2002 年末の資料に基く。数年前までは約 10 万と考えられていた。ヒトゲノムプロジェクトが概要を発表した時点での数値なので、今後研究が進めば変る可能性がある。（最近の新聞では、遺伝子数を約 3 万、DNA に占める割合を 1~1.5% としていた。）

現」にしか関与しない。そのため遺伝子では誤解を招きやすく、起因子等の方が適切ではないかという議論もある。

遺伝子を 情報 ととらえただけでは、真っ当に過ぎて話が拡がらない。多少意識して、遺伝子 - DNA をモノの地平における「個性」と受け止めてみる。

一個の石に個性はあるか。二つとして同じ形をした石がないとしても、それは石にとって偶然の個別性であって個性ではない。石は自らの形態を保存しない。単なる個別性を超えて個性であるには、その個別性は維持され再現される必要がある。

さらに、個性は同類の存在を前提する。同じ土俵で、時に協働し合い、時に競い合う「仲間」のないとき、個性が個性として発揮されることはない。

モノの地平における 情報 は、正確には遺伝子たちに具体化している。遺伝子と遺伝子たちの違いは大きい。ミクロに見るならば、個々の遺伝子は個性であるがゆえにまた個性であり続けるために、このレベルですでに競争(と共生)の中に置かれていることになる。マクロに見るならば、遺伝子たちに現れた差異は、彼らを包む背景のゆらぎと解釈できる。

しかし、単に維持・複製されるだけの個別性であるならば、それはまだ潜在的な個性に留まる。「発現」してこそその個性であり、遺伝子に刻まれた 情報 - 個性 は読み解かれなくてはならない。

モノの地平における 翻訳系 は細胞である。遺伝子たちの運ぶ情報は細胞において解読され、また細胞においてのみ意味をもつ。

現在、ヒトの全遺伝子コード DNA の塩基配列、A: アデニン、T: チミン、G: グアニン、C: シトシンの並び方は解読がほぼ完了している。また、23 対の染色体上に分散している DNA のどこが遺伝子でありどこがジャンク DNA (遺伝子としては機能しない DNA) かも特定されており、遺伝子のうち半分強は機能まで(推定も含めて)明らかになっている。

しかしそれでもなお、遺伝子の情報が実際に意味をもつのは細胞においてのみである。どの遺伝子が活性化されるかは、細胞が体の中でどこにあり、どのような発生の履歴をもっていて、今いかなる状態に置かれているかという TPO に依存する。そして全遺伝子の発動の機序が解明されたとしても、細胞の内部において以外、遺伝子を発動させることはできない。

裏側から言うならば、私たちが知っている遺伝子の機能とは「細胞の中で」その遺伝子がどのように翻訳されているかという知識でしかないのだ。

しかし遺伝子 - 情報 が細胞においてのみ意味をもつとすると、遺伝子の「個性」はほんとうに遺伝子の個性と言えるのか。案外、遺伝子は単に保存され複製され得る「差異」にすぎず、その差異を個性として実現しているのは細胞と言うべきかもしれない。

ドーキンスの「利己的遺伝子(1976)」 自然淘汰の単位は遺伝子であり、生物の体はいわば遺伝子の乗り物にすぎないという比喻 が衝撃的であったせいも、遺伝子 - 細胞関係においては遺伝子を主人公と見る潮流があるように思う。時代・知識背景が全く異なるので同列に置くのは無謀としても、フィルヒョーの「細胞は細胞から生じる(1855)」という指摘を、「新しい

意味で」評価しておくことにする。あらためて 卵と鶏は別物だったのだ。

よく考えてみれば、確かに「細胞が遺伝子からできる」と理解してはかなり不正確だ。そもそも最初から、遺伝子は卵細胞の中にある。遺伝子（RNA）が殻をかぶっているだけのウイルスは、細胞はおろか自分自身の複製さえ独力では行えない。²

では、遺伝子の奴隷ではない細胞とは何か。あるいは、遺伝子の個性（あるいは差異）の発現がそのまま細胞ではないとすれば、それはいったい何なのか。

遺伝子を離れて細胞をとらえ直してみると、それはむしろ「環境」の変動の累積と見える。

たとえば、「細胞膜の遺伝子」が特定されている。しかしその遺伝子は「細胞膜を作る」指令を出しているのではなく、細胞膜の「材料」リン脂質やタンパク質などの合成手順を記述しているにすぎないはずだ。あるいは直接材料となるのではない特殊な物質も合成され、それが「細胞膜を作れ」という指示のように働いているのかもしれないが、いずれにしても遺伝子が直接細胞膜を作っているわけではない。実際に細胞膜を「作って」いるのは細胞か、そうでなければ特定の時期に過剰に生産された細胞膜の材料自身（つまり自己組織化）だ。細胞から見れば、すべて「内的環境」の変動ととらえることができる。

同様に、遺伝子の発現した結果は詰まるところ特定の「タンパク質」であり、直接には細胞の内的環境の変化に反映される。

遺伝子 - 情報、細胞 - 翻訳系 の双方からあぶり出された「環境」を、モノの地平における 黙 ととらえることにする。

上で触れた「環境」は、細胞にとっての内的環境に限定されている。しかしある細胞にとっての内的環境の変動は、何段階かのステップを経て、やがて他の細胞に対する外的環境の変化につながるはずである。また、細胞を離れて環境に即して眺めれば、環境のゆらぎが遺伝子たちの個性（あるいは差異）として固定されているのであった。

以上でモノの地平における 情報 - 翻訳系 - 黙 が、遺伝子 - 細胞 - 環境 として定位された。モノの地平は、他の地平とは独立に、それ自体一個の「自己保存系」として機能している。

遺伝子（細胞）環境 と「開く」方向にたどれば、出発点の遺伝子は単数で、行き着く先の環境は静かな背景と受け止められる。しかし 遺伝子（細胞）環境 と「閉じる」方向にたどるとき、環境はゆらぎに沸き立つ豊饒であり、遺伝子は生命 36 億年の歴史を刻んだ遺伝子たちである。

モノの地平の内部で、さまざまなレベルの「動的定常状態」が渦を巻いている。それがたとえば 60 兆個の細胞の集合体である私の身体であり、あるいはその身体状況と相即的に

² ただし、原始の RNA は自己触媒能力をもち、結果的に独力で自分自身の複製を行い得ていたらしいことを示唆する研究結果もある。（前掲、木下清一郎『心の起源』p.8 他）

しかし独立した定常状態として発現している ところ である。

また、細胞が星のかけらからなり星のかけらを食べているという詩的な表現が受け入れられるならば、環境の「果て」は物理的な宇宙へと連なっており、一方本書の枠組みでは、動物たちの活動領域はその全体がモノの地平の中に埋もれている。

このような、モノの地平における いのち の実際を、「生命」と呼ぶことにする。

ところで、初め遺伝子に措定しようとした「個性」はどこに帰属するのだろうか。遺伝子の個性、細胞の履歴、環境のたわむれのゆらぎ、……？ 私としては、どれでもよくて、またどれでも尽くされたいと思っている。個性は当のものにとって絶対であると同時に発生学的な必然であり、視点をずらせば偶然ですらある。一方で排他的であり、一方で「仲間たち」との共生を前提してもいる。そのどれをも受け容れ得る モノの地平 - 自己保存系 に、驚嘆する以外あるまい。

コトの地平

自己の拓いたコトの地平については、一通りの記述が済んでいる。ただ、第三章ではモノ - コト - メタという重層関係に焦点を当てていたので、あらためてコトの地平そのものに膨らみ・奥行きをもたせ、その内部のダイナミズムを見ておきたい。

コトの地平の 情報 - 翻訳系 - 黙 を、言葉 - 自己 - 世界 ととらえる。

情報 に対応するのは、「言葉」であって言語ではない。仮に言語を文法と言葉の二つに分けるとして、文法は 翻訳系 にまわし、残った言語の固定的な側面を言葉と見る。³

言葉は固定された区別であるだけでなく、自らの 区別 - 個性 を維持・再生し、場合によっては創出しさえる。⁴

「成」と「成」の見分けがつかだろうか。(前の方が一画多い。) 正式な仏典では今でも「成」が使われている。(「成」が正字で、「成」は略画俗字だった。) このような区別が、思いがけないところで静かにしたたかに保存され続ける。

あるいは、自ら動力を持ち、時速 100 km 以上で走行可能で、現代では事実上電子工学の塊と化している乗り物 (car) を示すのに、数千年前の馬に引かれた 2 輪車 (cf. cart, chariot) と同じ言葉が使われている。(これらは本来「話し言葉」である。) かと思えば「若い女の子」を指す言葉は寿命が短く、girl は gal にとって代われそうだ。(すでに lass は死語だろう。)

³ 第二章のコトバと拡がりは大きく変らない。しかし第二章では言葉そのものの厚み 個々の語彙のニュアンスの差異や、言葉たちが呼応し競い合う様、果ては言魂と形容されるような言葉そのもののおどろおどろしさなどをばっさり捨て、固定された指差しとしてののみとらえるためにコトバと平面化していたが、それを本来の「言葉」に戻す。

⁴ 実は、遺伝子 (gene) との類 比で、文化システムにおける自己複製子として提唱された概念にミーム (meme、ドーキンスによる造語) がある。当初は、コトの地平の 情報 としてミームを取り上げるつもりでいた。しかしミームの「実体」がはっきりせず、また無理になじみの少ない用語を取り上げるデメリットを考え、「言葉」で代替している。言葉がミームの実体だと主張するつもりはないが、ミームに頼らずとも意図は達せられていると思う。

モノの地平の 情報 - 遺伝子 の場合と同様、言葉もより直接にはコトの地平の背景、
黙 たる「世界」に連なる。⁵

本書での「世界」は、^{ゲマインシャフト} 枠組み上、社会（^{ゲゼルシャフト} 共同社会・利益社会両面を未分化に含む）から個人の内面世界にまでまたがる。世界の漣が流行ならば、大きなうねりが文化であり、さらに広範な流れとなれば文明に至る。

その底を貫くのが、「言葉」との連関である。言葉（言語化される以前のシンボルを含む）を離れた世界はない。逆に言えば、言葉の背景であり言葉を支えているものはすべて世界なのである。

言葉 - 世界 の只中に、コトの地平の 翻訳系、「自己」が置かれている。⁶

順番から言えば、自己はまず社会的に生れる。周囲の「自己たち」が不可解に感じられた日から、微妙な違和感が堆積を始め、それがある閾値を超えたとき くつきりと外界として姿を現わす。そして外界ではない領域、あるいは外界に侵食されなかった聖域が、自己の内面世界（自分）として残される。

その後の自己の発達過程には、本書の主題からそれるので踏み込まない。ただ私は、社会的 - 対他的に生れただけの自己ではまだ弱く脆く、豊かな自己として ^{もろ} 逞しく生きるには論理的な同定 「心 = 身」、「有限 = 無限」の 2 段階のステップを経る ^{たくま} を通過して生れ直す必要があり、すべての人にそうなって欲しいという思いを抱いている。

残念ながら 現実とは異なる。いのちの何かが、否、いのちの全体像が、多くの人に対して隠されている。そのからくりを「私自身が」知りたい。それが本小論の本当の動機である。

コトは、言であり事であり殊である。表面は差異・区別に見える。しかしその實際を、

⁵ 第三章では「言語 - 論理」的な関係性の総体と見えるよう、世界を意図的に平板に記述した。しかし実際には、世界は歴史や伝統と言った奥行きをもち、情や打算、怨念さえも渦巻く舞台である。言葉が生き延び増殖し、あるいは死に絶えときに復活するのも、翻訳系 たる個々の自己の関与というよりは、世界の大きなうねりや気まぐれな ^{さざなみ} 漣 によると受け止める方が、私には納得しやすい。

⁶ 世界同様、自己も第三章とは大きく趣が異なる。第三章では「論理的同定」に焦点を当てる目的で、自己を明確に「点」とみなしていた。論理 - 数学的な点には広さが無い。自身の描かれている地平そのものの実体感を無化し切ったとき、内的な構造の現れとして立ち上がるのが点である。（「2 つの線が交わるころ」が線を離れてとらえられたとき、点が見えたと言えようか。動物には点を理解することもできまい。）

今、世界を 黙 豊饒なる背景 として再定位する中で、自己 - 点もおのずとコトの地平上における拡がりへと押し戻される。

混乱を避けきれいに整理することを優先するならば、第三章での自己と用語を分けて「自分」とでもすればよいのだが、ここではむしろ混乱を内在している方が適切に思える。（用語としては、自分とは言い得ている。しかし「言葉」としておとなしすぎて、必要な場面で問題に切り込んでいく用に耐えない。私の前に立ち塞がっているのは……すでに自己である。）

自己が、純粋に論理的な定式に至ったのはごく最近（19 世紀末～20 世紀前半）と見てよいだろう。しかしアインシュタインがいなくともおそらく原爆は作られたであろうと同様に、言葉が生まれ世界が動き始めた コトの地平が拓かれた とき以来、「自分」が「自己」に至るのは不可避であったと考える。

私は「共感」ととらえる。

言葉 - 自己 - 世界 というコトの地平の自己保存系が 言葉 (自己) 世界 と動いたとき、共感が再現される。たわいのないおしゃべり、あるいは伝統ないし神話が、このように機能する。

言葉 (自己) 世界 は、共感の保存であり、新たな共感の創造である。コマーシャルも詩も、今の関心に照らせば同じことをしている。

どちらの動きも、翻訳系 である自己を通過して あるいは自己の内で 起っている。そしてさらに、外界たる「自己たち」から隔絶されて誕生した自己自身が、実は切り取られた共感なのだ。

裏で繋がり響き合う共感が前提されないとき、違和感が生じることはない。不可解な他と出会ったとき、実際には最も雄弁に、共感が響きわたっている。⁷

コトの地平に現れた いのち の実際は、以上のような意味での、共感である。

メタの地平

メタの地平の記述には、この地平の特殊事情から、非常に困難な問題がからむ。

メタの地平は、コトの地平における 特異点 - 自己 そのものが一つのへそとして浮かび上がったとき、言わば反照された地平である。放っておけば果てしなく拡散(内へ向っては凝集)していきかねない 言葉 - 自己 - 世界 に対する上からの輪郭であり、機能は歴然としているが 実体がない。

あるいは、正確に言い直したとしても、メタの地平の出来事を「翻訳」することのできる「語彙」が、コトの地平内部にはない。(文字通りの意味での言語道断。)

今腑分けという方法論に借りて、対象を見る「視点」をカッコに入れている(自己の地平に固定せず、フリーにしている)ものの、メタの地平の内部 そのように呼びうるものがあるのかないかすら「判断」できないが、比喩的にそう形容するとして には入り込めない。

やむを得ず、メタの地平に照らされて生じた、コトの地平の「影」に頼る。そのため、たとえばメタの地平の「実際」と言うにしても、実はコトの世界に宿った影絵芝居を眺めているにすぎないことを常に意識に置いておく必要がある。⁸

メタの地平を構成的に記述することは無意味なので、端的にその動き、すなわち 翻訳系

⁷ なお、「動物との共感」をどう見るかについては、現時点で考えを詰め切れていない。おそらく「共感」という用語自体に、コトの地平に押し込めにくい(モノの地平にも自然に滲み出してしまう)個性があるのだろう。各地平を峻別するというこでの目的に照らすならば何らかの「線引き」をしたいのだが、この点については曖昧なままに残しておく。

⁸ 影絵芝居そのものにとらわれたならば、指しか見ない犬と同列である。影絵芝居を影絵芝居として楽しみ、しかしその顛末を常にメタの地平に「返す」姿勢が、無生法忍に他ならない。

を見る。手がかり 影 として、「業」に着目する。

業はサンスクリット語 ^{カルマン}karman (< 語根 kr「作る」) の訳語で、造作、作用、行為などを表す。インド思想全般では輪廻転生や解脱の主体とされ、通例身業 (行為) ・口業 (言語) ・意業 (意識) の三業に分けられる。それらすべての働きだけでなく、それによって生じる「潜勢力」も含めてとらえた用語である。

古くは『ウパニシャッド』に「実に人は善き業によりて善き人となり、悪しき業によりて悪しき人となる」と説かれている。

その後、ヒンズー教・仏教・ジャイナ教など、様々な教えの中で、考えられる限りの展開をしていく。仮に業の概観を試みたとしても、それを通じてある「業観」浮かび上がるというよりは、人間の宗教的な問と実践とがいかに多岐にわたるか 換言すれば人間の業がいかに深いか ということの思い知らさせられることになるだろう。⁹

本書では、業という言葉の借りつつも、これら一切とはまた独立に、業を定位する。渦である。¹⁰

動きが本性である業に対して、それが静的に固定されたものを「我」と見る。それにより 翻訳系 - 業、情報 - 我 という組み合わせができる。¹¹

仏教は「諸法無我 (いかなる存在物も固定的な実体をもたないの意、諸行無常、涅槃寂静と並んで三法印の一つ)」の立場をとり、我そのものの分析とは無縁である。(仏教以外の教えの批判としては伝統的に「常・一・主・宰」の四義でとらえる。) ただ、仏教で我と言うときには、事実上我執 (自己に対するとらわれ) の意味であることが多い。ここでは、我を渦たる業の「中心」が (仮に、ないし誤って) 実体視されたもの、としておく。その延長で、我執を煩惱^{ぼんのう}と同一視する。

業は、我を中心に渦巻く。渦巻く業が我を支える。

⁹ たとえば、ジャイナ教では業は一種の微細な物質とされる。ジャイナ教によれば、身体の働きによって微細な物質が生まれ、それが靈魂を取り巻いて (汚して) 業身と呼ばれる身体を形成し、靈魂を束縛して輪廻転生に繋ぎ留める。

他方、浄土教には宿業^{しゆくごう}という考え方があり、誤解 (あるいは、不毛な拡大解釈) が持ち込まれた場合、現在の結果 (社会的な身分、苦楽の応報、……) はすべて過去世の業によるという決定論的な理解がされることすらある。(本来は、「今」の自らのあり方を他に責任転嫁せず、そのまま ようこそ、ようこそと 受け入れる態度を支えるための枠組みなのだ。)

¹⁰ 第一章では、法^{ダルマ}を渦ととらえた。客体視するならば (客体化できるものは) すべて法、その中心に自己を据えて自分の問題として引き受けるならば (自己が主体的に関わり得るものは) すべて業、と考えている。

業が渦ならば、その基体は何かということになるが、その時々において適当なものととらえてもらえばよい。法も業も、所詮影にすぎぬ。

¹¹ ここでの我は、インド思想全般に照らすとサンスクリット語の ^{アトマン}ātman に対応する。一人称単数の代名詞 (aham) とは関係がなく、ドイツ語の atmen (息をする) と同語源で、本来「氣息」を意味した。

サンスクリット語に戻ってもあまり (イメージをふくらませる上で) 得るものはない。むしろ漢字の「我」が「我 (先のぎざぎざになった^{ぼん}戈) 」から来ていることの方が示唆的だ。

縁起論の一つ業感縁起では、この世を惑業苦と転がっていくと説く。業は惑い(煩惱我執 我)から生じて苦の果に至り、その苦が新たな惑いを生む……。一杯、人、酒を飲み(惑)二杯、酒、酒を飲み(業)三杯、酒、人を飲む(苦)。

業感縁起によれば業の行き着く先は苦となるが、それでは業の側から見られているのみで、本小論の枠組みにおける背景 - 黙としては狭い。情報翻訳系黙と展開する方向にたどったときの黙は暗黒の沈黙としてもとらえられ、苦と重なり得るにしても、情報翻訳系黙と語り出だすときの黙は漲る豊饒である。その両面を支えるに足る影として、本書では業の背景たる黙を「如」と受け止める。¹²

メタの地平の黙を如と味わうと、我業如の展開は、苦であるという現実は何も変わらないとしても、(如に)確かに受け止められた苦、悦ばれる苦に変容する。さらに、我業如の向きの働きは、我を如の現成(如の具体的な実現)と見る宗教的な解釈に道を開く。

我業如の向きに動いた如の顕現が、如来(tathāgata、「如より来れるもの」)である。¹³

またふつうに業と言うと、迷いに通ずる否定的な意味合いの込められていることが多いが、それは我業の方向のみを見ているからであり、業そのものに本来そのような色合いがあるわけではない。浄土教では、阿弥陀仏の救済の働きも「本願業力」のように業の名で呼ばれる。業は、業如の側面も持ち合わせているのだ。

業如をそのまま我と引き付けければ、我は如の顕現になる。それをさらに我業如と転じたとき、我の先には如が啓ける。

「罪障功德の体となる

こほりとみづのごとくにて

こほりおほきにみづおほし

さはりおほきに徳おほし」(親鸞の和讃¹⁴より)

メタの地平の「自己保存系」は、我 - 業 - 如としてコトの地平に影を映じている。その実際を「歓喜」と受け止めよう。

ただし、具体的な歓喜が成り立つのはコトの地平の内である。さらに、如業我を「即身成仏」と解釈してみたところで、我に成仏しているのは如であって、我ではない。歓喜も拘泥すると毒になる。メタの地平に返し忘れてはならない。

¹² 如は、サンスクリット語の副詞 tathā、またはそれを抽象名詞化した tathatā の訳語である。「あるがまま」の意で、英訳では suchness という造語が用いられることもある。

仏教における如は真理を意味する。その響きをこめて真如、あるいは真如実相と形容することも多い。

¹³ なお、「如来」は tathāgata を tathā + āgata と分節したときの訳語で、tathā + gata と分節すると「如へ至るもの」の意味(如去?)にも解し得る。

¹⁴ 漢文ではなく和語をもって讃嘆する詩の意。親鸞は五百首をこえる今様形式の和讃を撰述している。引用したものは『高僧和讃』、「曇鸞讃(曇鸞を讃えた和讃)」からの一首。

いのちの位相

ここまで、一つのいのちを三つの地平に斬り分け、それぞれの地平を相互に独立した自己保存系と見てきた。表に整理すると次のようになる。

メタの地平	我	業	如	歡喜
コトの地平	言葉	自己	世界	共感
モノの地平	遺伝子	細胞	環境	生命
	情報	翻訳系	黙	実際

この整理は「事実」とは関わりを持たない。私の見たいものをいのちにおいて見るための枠組みであり、枠組みそのものに何ら実体はない。

この枠組みにおいて明確に定位されるのは、中央の「自己」である。逆に言うならば、自己を（いのちにおいて）きちんと定位するために、上下左右を押さえてきた結果がこの枠組みである。¹⁵

私は、この三つの地平すべてにまたがって、いのちを担っている。

身体 60兆の細胞からなる有機体 は私である。あるいは、私は身体としてもある。同列において、こころも私である。私 - 心身 は生命を宿す。¹⁶

自己は絶対的に私である。あるいは、私は自己意識として現れている。私 - 自己 は共感を生きる。

さらに、魂 靈的・宗教的存在 は私である。あるいは、私は人間として生れてきた責任を受け止めてはじめて、一人前に私である。私 - 魂 は歡喜に活かされる。¹⁷

このような、私における重層的ないのちの姿を、「いのちの位相」と呼びたい。いのちはあまりにも身近で、同時にあまりにも絡み合っている。不用意に吟味しようとすると、すぐに迷子になる。いのちは、触れている位相を確かめながら、議論しなくてはならない。

一言、いのちを位相においてとらえる観点から、現代の「やせ細った」いのちの姿に一太刀ふるおう。肥大した自己が、いのちの癌である。

¹⁵ 二次元で整理した表の「厚み」として、自己たちの重なりがある。

¹⁶ 「こころ」という用語を、本小論では「動物とも共有できる」位置に定位している。理性的ないし社会的と形容され得るこころの側面は「自己」が、靈的とでも呼ぶべき側面は「業」が担う。

¹⁷ 仏教の立場からすれば、「魂」では（実体視されやすいため）用語として座りがよくない。業の、如へと連なる側面を（業 如の方向で）とらえたと解釈できる用語に「如来蔵（仏性とほぼ同義）」があり、上の枠組みにはその方がなじむ。しかしここでは枝葉末節にはとらわれず、一般的に通りのよい（であろう）表現を使っておく。

一刀一断

「南泉斬猫」^{なんせんざんみょう}と知られる禅の公案がある。¹⁸

ある時、東堂の僧たちと西堂の僧たちが、子猫を言い争っていた。

見かねた南泉は猫をつまみ上げて言った。

「お前たち、禅の一語でも言い得るならば、この猫を助けよう。言い得ぬならば、斬り捨てる。」

誰も口を開かなかった。

南泉は遂に猫を斬った。

……

夕方、趙州が外出先から帰ってきた。南泉は彼に猫を斬った一件を話した。趙州は履くつを脱いで、それを自分の頭の上に載せて出て行った。南泉は言った。

「もしお前があの時おったならば、猫は救えていたのに。」

本小論で取り上げるかぎりにおいて、子猫はいのちである。ならば南泉は何を斬ったのか、なぜきったのか。

僧たちは何を言い争い、またなぜ南泉の問に口をつぐんだのか。

そして趙州の奇行は何を語っているのか。

本来、禅の公案は思弁するためのものではなく、そのままに受け止め、端的に実践すべきものであろうと思う。無用な解釈は控える。

ただ、書き手の責任として、斬猫を取り上げた意図は伝えなくてはならない。南泉を評して「みごと、一刀兩断」とする解釈につなげたいのである。¹⁹

そしてこれら一切を承けて、道元、静かにいわく、「一刀一断」。

今、私はいのちをいのちに還そうとしている。この章の前半で腑分けしたイノチを、あらためていのちと引き受けようとしている。道元の一刀一断は、私に「いのちは真剣に考えよ、ただしいのちのままにしておけ」と響く。ここは、無用な解釈はなどと逃げることは許されない。

問う。私は、僧たちか、子猫か、南泉か、趙州か。答える。趙州である。否、趙州にな

¹⁸ 南泉普願は人名。出典は『無門関』第十四則。(『碧巖録』第六十三則他にも収録されている。)現代語訳は有國、やや脚色した。趙州じょうしゅう從諗じゅういんも人名、南泉の弟子。共に中国唐代末の人。

¹⁹ 傍点は筆者。このような評は数多くあるらしいが、直接には『碧巖録』第六十三則に添えられている頌によった。前後は省略して、かつ意識している。また、正確には原文では「一刀兩段」となっている。

この評の背景には、南泉は争いの元の猫だけでなく、迷いの根である煩惱をバツサリと切り捨てたのだ、という受け止め方がある。

らなくてはならない。

生きながら 死人となりて なりはてて

心のままに 為すわざぞよき

とは、前半は南泉を、後半はそれに応じた趙州を、うたった歌と言われる。南泉はみずからのいのちをかけていのちそのものを斬った。そして趙州の奇行に意味はない。趙州は、ただ咄嗟に、かつうろたえを精一杯表現しながら、行為したのである。動かざるを得なかったのである。そうやって 南泉と共に いのちに還ったのだ。

正確を期せば、趙州の奇行は本来それ自体が独立した公案であったもので、それを「意味はない」ではいささか舌足らずかもしれない。彼は意味にとらわれず、意味を離れ踏み越えた業（行為）を顕わにしたのである。

この「解釈」に、出典はない。本書の枠組みの内における、「腑分けの後始末」のつもりである。逆に言えば イノチの腑分けは、斬猫に匹敵する「危うい」綱渡りなのだ。

とうとう、最後の手を離さなくてはならないところまで来てしまった。本当は、私は趙州になることはできない。私がいのちを還せるのは、趙州のいのちではなく、私のいのちにおいてのみである。

ここで、これまで本書で組み立ててきた枠組みそのものに、見放されよう。私は、他に逃げ場のない私のいのちに、他ならぬ私の業に、愚に、還る。悪人正機の、有難さよ。

「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。されば、それほどの業をもちける身にありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ。」（『歎異抄』後序）

たくさんのミツバチが寄り添いせつせと巣を作っているとき、彼ら（あるいは彼らのうちのどれか）はあのきれいな六角形を目指しているのだろうか。そんなことはあるまい。彼ら一人ひとり、ただやみくもに、自分の思い（衝動）のままに行動している。その営みの総体が、過程を内在した形態として、計算されたかのようなハニカム構造に具現していく。

自己は、自分が、目的を知っている（あるいは知り得る）かのように、合理的に考え正しい答を見出し得るかのように、思い上がっているのではないか。いのちに照らしたとき、自己は盲目的なミツバチと同列である。

私は、ミツバチの作る蜂の巣が、予定調和だとは思わない。ましてや、決定論だとも宿命論だとも考えない。ミツバチたちは生きている。蜂の巣は、きわどくもろいが しかしだからこそ 確固として輝き出だした彼らのいのちの証である。

自己よ、身の程を知れ。これが否定的、抑圧的に響くならば、それは「生きていない」自己だからだ。世界は、自己が願うようには変らない。しかし活かされた自己の営みは、違うことなく世界に受け止められていく。

私はいのちのへそである。いのちは私のへそである。いのちの分析に居着くことは無益だ。私はただいのちに載って いのちを証^{あかし}するばかりだ。

おわりに

言うまでもないが、本小論は自然科学的でないのはもちろん、おそらく「学的」ですらない。ここで「学」は、教学 特定の仏教宗派における教義の体系 も含む。

私は、徹底して、私の「外」にあるものには頼らなかった。その意味では、これほど「私の強い」文章も少なからうと思う。

ただ、「閉じて」はいないつもりである。正確に言うならば、閉じることができないところまでは自に徹し切ったと自負している。

子供の頃、私は身内から「とも坊」と呼ばれていた。浄土真宗本願寺派の布教使で若い頃は家にいることの多かった父が、畑仕事をする折、そばにくっついていゝんな「お話」を聞くのが日課だった。あるとき 小学校低学年くらいだったと思う 「とも坊、宇宙は無限なんよ。じゃからね、どこをとってもそこが宇宙の真ん中なんよ。」

それが私の出発点であり、また、結局そこからまったく離れずにいる。

最初に私家版と断ったように、本小論では読者のことを考えていない。文字通り、自分のために書いた。表現として私個人と離れても倒れないようには心がけたが、だれに向けての表現かという部分が空白になっている。そういう形で、私は私のいのちの実際を「自分の前に」据えて眺めてみたかったのである。

今書き終えてみて、思っていた以上に目的は達せられたと実感している。枠組みは概ね当初に構想していた通りなのだが、具体的な内容は事実上その時そのときに考えた。結果的に、かなり正確な「実況中継」になっている。当然ながら、常に話の行き着く先は見通しながら筆を進めた。にもかかわらず、当人にとっても思いがけない展開になっている部分は少なくない。

もし、重なる部分のある問を抱えている方があったとすれば、参考になり得る点もあろうかと思う。しかし内に何らかの問を持たずに本書を読んだとしても、時間の無駄でなければいざだたせるだけだろう。本書では、問そのものを 私のいのちの実際として進め続けることに専心しており、問の終りとなる答は拒絶している。

私家版という枠組み上ピントはずれであることを承知しつつ、最後に萩原秀紀氏に謝意を表したい。氏は 私にとっての沢庵石である。本書は、氏の前における私の独り言とすべきものである。

平成十五年三月二日